

加能連歌壇史藁草・その二(前)

——能順伝資料・その五——

棚町知彌

要旨 別稿、加能連歌壇史藁草・その一(『白山万句——資料と研究——』所収)では、慶長年間の白山万句を中心として、加賀藩々政初期の連歌壇を対象とするが、本稿では、梯天神社創建の明暦年間より元禄・宝永年間に至る半世紀を対象とする。この期間の加能連歌壇は、能順を中心として把握することが可能である。筆者が北野における能順の足蹟をこれまでにまとめた左記四編を承けて、本稿に「能順伝資料・その五」と副題する所以である。

なお、紙面その他の事情により、本稿・前編に収める資料は、作品を主とする下記十七編にとどまった。能順の独吟作品、その他作者の独吟作品などの多くは、〈参考——〉にわずか五、六名について収めた〈人別資料〉のすべてとともに、続稿「その二(後)」以下に収める予定である。

また、能順の京北野関係の資料や、靈元上皇連歌壇関係の資料も、続稿に割愛した。

記

—能順伝資料・その一—

北野学堂連歌史資料集（貞享年間）

（近世文芸資料と考証 9号、昭49年2月刊）

能順伝資料・その二（預坊時代・前）

（有明高専紀要 11号、昭50年1月刊）

能順伝資料・その三（預坊時代・後）

（有明高専紀要 12号、昭51年1月刊）

—能順伝資料・その四—

宗因点『延宝五年 北野三吟連歌』

（近世文芸資料と考証 10号、昭53年2月刊）

本稿所収内容一覧

- 〈作品一〉 明暦2年9月25日 玉何百韻
- 〈作品二〉 明暦3年8月25日 何田百韻（初一順）
- 〈作品三〉 寛文2年11月8日 初何百韻
- 〈作品四〉 寛文4年5月吉日 夢想百韻
- 〈作品五〉 寛文8年9月 正的独吟百韻

〈作品一六〉 寛文9年正月吉日 夢想百韻

〈作品一七〉 『延宝初頃』 何路百韻

〈作品一八〉 元禄4年6月7日 「於小松」何衣百韻

〈作品一九〉 元禄4年7月 何路百韻

〈作品一〇〉 元禄4年10月5日 追悼百韻

〈作品一一〉 元禄5年正月18日 何船百韻

〈作品一二〉 元禄12年正月 山何両吟百韻

〈作品一三〉 元禄16年9月18日 花何百韻

〈作品一四〉 宝永4年11月28日 追善独吟（自注）

〈作品一五〉 正徳4年12月21日 何人百韻

〈参考一〉 『燕台風雅』抄

〈能順一〉 『能順天和三年より発句書留』

〈作品一〉

小松天満宮所蔵、原懐紙
白無地を卷子本に改装

明暦二年九月廿五日

賦玉何連歌

松に菊千年かさなる家居哉

利常

見はやす紅葉いろ／＼の庭

綱利

へたつる旅のたよりうれしも

重政

野も山も霧の籬のかこひこめて

利次

木こりこそ花ある山のしるへなれ

重俊

しつかなりけり月の朝風

利治

雲やかすみのまよふみね／＼

重幸

漕いつる浦半の舟の数／＼に

御惣代

二 東風ふけは空なへつゝも雨おちて

孝治

むらや入江のすゑにあるらん

能順

また明のこる海ははるけし

能順

はるかにもゆふへをつくる鐘なりて

孝治

つりたれてかへらぬ沖の海士を船

方勝

雪の晴まの道いそく人

清元

あさりすてつゝかもめ飛かふ

清元

ウ
分ゆかにかたはふもとの狩衣

方勝

朝日さすこや野の末や広からん

重政

見渡し遠く明る野の原

賞山

霜はしづくにけふる松はら

重俊

松かけの奥より鳥の鳴たちて

重政

真砂地に寒ぬる風も音絶て

重幸

岩ほをこゆる波や高けん

重俊

時すきにたる御神楽の跡

賞山

嵐にやきはひておつる滝津川

重幸

月いつらゆふしてしろき宮所

能順

秋ふけぬれはしくれふるなり

政勝

霧間なみよるすみの江の暮

孝治

小男鹿のひとりつまこふ声さひし

能順

うかへぬる舟はたよふ秋の水

清元

真萩いつしか散し野の道

孝治

なかれのすゑにちりし竹の葉

方勝

夜ふかくもおき行袖のひやゝかに

清元

里輪田の苗代垣根花くちて

孝治

又あはんと月のかねこと

方勝

きゝなれつるもかへる鳥の音

重幸

いくたひかまきかへしたる文のうち

賞山

ニッ
おしみぬる春もいつかは過ぬらん

重俊

まなはて月日をくるをろかき

清元

きけはわひしくいぬほふるなり

重幸

のほるへき位を余所になすはうし

賞山

しのひつゝこととふもうし宇治の宿

孝治

引こもりすむ小野の山陰

能順

つきぬうらみやなをさりの中

重政

水の音もなこやかなりし暮さひて

方勝

さかしらにかはるは人のこゝろにて

重俊

はらへすてゝや袖かへるらん

孝治

あたになりぬるたのみはかなや

清元

車やるかたもあらはにとゝろかし

清元

あさかほはいつる日かりにしほれそひ

方勝

人目をしのふ心くるしも

重政

みきりの尾花月まねくかけ

孝治

あふとなき夢のかよひちいかならん

能順

住すてしいほりはあれてすさましみ

賞山

うき旅まくら月もあはれめ

重俊

あらしの霜のふかき柴垣

能順

露しけきあなの小篠をかたしきて

孝治

たつぬるも鵬の草くき冬枯て

孝治

霧わけまよひうらふれし袖

能順

はやしもあさくなりしむら竹

重俊

うつこゑもかすかになれるあさ衣

重幸

かしこきか栖いつくにうつすらん

清元

早瀬をすくるなみのいかたし

方勝

さらにこゝろはとめぬ世の中

重幸

三 しつみぬる鮎も出つゝはしるらし

重政

あまたにもちぎるやさそな色このみ

能順

岩間にゐける鷺そたち行

孝治

かたたかへぬる使何そも

賞山

風ませにふりそひにたる玉あられ

清元

遠くしもゆくもろこしの船路にて

重俊

かしけしまゝのかけのくれ竹

賞山

松浦のなみや明はなる覧

方勝

誰園としられぬはかり物ふりて

能順

ひくあとと晴こそわたれ塩くもり

重政

鶴のつはさををくる秋風

孝治

したしき友の中そしらるゝ

清元

里ちかき深田の面の月すみて

賞山

くむ酒におほえす橋やすきけらし

重俊

うちなひきたる露の草むら

清元

いつれありとも百敷の花

方勝

かり寝してたか朝たちし花のもと

能順

わきてこの殿の南は長閑にて

賞山

春の野をふむこまのあしなみ

重政

影もくまなくてらす春の日

重幸

水しろき沢辺の氷とけやらて

重幸

雨はれていとあそふなり天津空

能順

まねなるもなをもとめてそつむ

能順

胡蝶やつれてたかくとふらん

孝治

葉かくれに所ところのつほすみれ

孝治

おはしまによりそふまゝの袖おほみ

清元

むかしの跡や残るいしすへ

重俊

声もゆたかにうたふ舞人

重政

山科や見しにもあらずおもかはり

清元

利常 一句

方勝 十

一夜のうちにつもるはつ雪

賞山

綱利 一句

賞山 十

しくるゝもをやめはひらく窓の前

重政

利次 一句

重政 十

入あり明の月やなかめん

清元

利治 一句

重俊 十

わかれつるなこり身にしむおもひして

能順

御惣代 一句

重幸 九

あきにはなさぬきぬのうつり香

孝治

能順 十五

政勝 一

わすれしなすかたあやしきみたれかみ

方勝

孝治 十六

いはけなきよりのためてそをく

能順

清元 十四

へ作品一三〇

金沢市立図書館所蔵『松雲
公採集遺編類纂』ノウチ

明暦三年八月廿五日 於社頭始興行

賦何田連歌

千世の秋神や告げん松の声

天満月のすめる瑞籬

水清き御池に浮ぶ霧晴て

砌に羽吹鶴あまた也

ひかりさす真砂の上や広からん

そゝきし雪の朝け静し

雨の後軒端の竹の風過て

鉤簾卷上る袖の涼しさ

ッ 見るくも影あらは也飛螢

流の末になひく草く

岸伝ひさして小船や下すらん

住一村や近き川つら

くらかりし山のあわいも明離

峯より嶺の雪や消なん

利常

綱利

利次

利治

惣代

能順

孝治

直賢

清元

方勝

賞山

重政

重俊

重幸

さたか成松は嵐の宿りにて

淋しさや只室の戸の暮

〔初一順のみ〕

能賀
執筆

へ作品一三一

石川県立郷土資料館所蔵、原懐紙

寛文二年霜月八日

賦初何連歌

庭やこれうつし越路の雪の山

松に冬なき月の朝風

昨日より園の紅葉の散透て

ね所かふる鳥の声く

岩まく行水白く明渡り

あさ瀬のなみに小船さすらし

一むらの竹の葉そよく陰すし

ゆふへほのかに螢とふなり

虫の音に外面の秋やちかからん

また露をかぬ野辺の草く

むら雨のけしきは月になりけらし

宗因

政長

知清

俣海

時春

玄固

賢勝

能直

直景

堯盛

正方

風ひやゝかにはやき浮雲

宗因

沓ひくあとや霜のしら砂

堯盛

跡先に行をみたせる天津雁

政長

誰めてゝおりつるませの菊ならん

直景

船のなかめは遠き海つら

知清

月にゆつりて門守もなし

宗因

立なみやなき渡らし嶋かくれ

倪海

冷しき夜はをもしのふかよひちに

政長

水にしつむ入日すくなき

時春

おもふあたりのうき犬の声

知清

かさなれる霜の上よりさえまさり

玄固

とめきつゝおしむも桃の花ちりて

倪海

まくらにひゝくかねのまちかさ

賢勝

霞くむへき友まねく暮

時春

急きしはうきゝぬくの床なれや

能直

嘯りしあまの塩屋のあたゝかに

玄固

あかぬちきりをかはす夢人

直景

軒に小鳥のなるゝ日のかけ

賢勝

去年見つるあるしむなしき花の下

堯盛

おひそふる砌の竹の霜とけて

能直

梅のさかりをとひてこし袖

政長

かれたる中にさける朝かは

直景

二分暮す野辺の黄鳥やとりかせ

宗因

のこりぬるうき身もあはれ末の秋

堯盛

すむ方いつこ霞む山陰

倪海

今いくとせか玉祭りせん

政長

古寺の春の御法はきかまほし

知清

袖の上にかはらぬものは露なみた

宗因

前のほとけの道はゆかしも

玄固

月にいのるもあふせかなしき

倪海

かりの世をおもひ取てものかれかね

時春

旅にしていもをこふれはいねかたみ

知清

よはひの後のつかへくるしき

能直

ねを鳴てきくすまのうら風

玄固

朝ことのさむさをわふる神司

賢勝

雲まよふ空にあとなきほとゝぎす

時春

ふり行雨のあしやとからん

堯盛

よるへからにそあたけおさまる

宗因

しはしたゝつもらぬほとの花の雪

政長

波わくる千船もつとふ磯つたひ

時春

笠のはつかに夕日のとけし

宗因

八十のみなどの暮かゝるらし

堯盛

三 打かすむ袖は市女の帰さにて

直景

吹風の霧をなひかす笹の窓

直景

里を見やればへたつしかまつ

知清

とりし早苗も色になる比

知清

釣船の川門はるかに漕はなれ

賢勝

鴨かけりなくやさひしき朝朗

倪海

満しほかせやたゆむ未明

時春

はつ木にもろき月のした露

時春

露しくれふるも今はたやゝはれて

倪海

賤の男かうちやつしたるあさ衣

玄固

みにしむなみたとけかたる中

政長

まつしきすま居たふるあはれさ

政長

君とへはをともまかはぬ荻の葉に

玄固

さかへつる家なりけるも出てきて

賢勝

おたひすゝめそ此月の暮

直景

なくなるきはをしたふすへらき

堯盛

つみなくはめつらかならん草の庵

宗因

花鳥のなすらへもなにかたち人

宗因

みやこの外はやうかはるのみ

賢勝

たく香なまめく春の御遊

倪海

あまれりやこゝろたらすや和歌

堯盛

名 おりにあふ霞の洞はしめやかに

知清

またいはけなき人の手ならひ

倪海

谷の底まで雪はけぬめり

玄固

うる琴はそれとはかりのしらへにて

知清

山すみのたよりにあさるはつわらひ

時春

なれさるほとははつるまははり

玄固

里のわらはを友なふもよし

宗因

三ッ

怨をしつゝまぬこそは本意ならめ

政長

笛の音のこなたにかよふちか隣

堯盛

前わたりしてふかす夜な／＼
 行ていさかさらぬ車おほつかな
 しのふもさすかみゆる袖口
 出たつはすりかりきぬのよそひにて
 よむことの葉も翁さひたる
 末かけし産やしなひをいはふ日に
 ひろきゆかりのすたく此殿
 ほと／＼にいたはりのそむ位にて
 ふるきわかきもまなふ月の夜
 名
 へたつなよその暁を胸の霧
 秋になしてや人のわかれん
 つれなきか名のみあふきをかたみにて
 おほろけならぬ契こひしき
 同腹もすめる所は遠さかり
 あへるによする旅の一筆
 山産のためとてかさす花の枝
 ゆふへは色のます岩つゝし

直景 宗因 十二
 政長 能直 四
 賢勝 直景 八
 玄固 兜海 十一
 時春 時春 十一
 知清 知清 十一
 宗因 宗因 十一
 堯盛 堯盛 十一
 時春 時春 十一
 玄固 玄固 十一
 知清 知清 十一
 兜海 兜海 十一
 宗因 宗因 十一
 政長 政長 十一
 賢勝 賢勝 十一
 直景 直景 十一
 能直 能直 十一
 元林 元林 十一
 惣代 惣代 十一
 能順 能順 十一
 方勝 方勝 十一
 重次 重次 十一
 正方 正方 十一

〈作品一四〉

寛文四年五月吉日

夢想之連歌

梅はいつくそ香はもとめけり
 陰ふかく千年の春の宿の松
 長閑になるゝ庭のもろ鶴
 つぎ山や霞の洞をうつすらん
 凍ひまそひおつる滝津瀬
 浪高き遠の川風すさひ来て
 月に露散岩かねの道

元林
 惣代
 能順
 方勝
 重次
 正方

金沢市立図書館・加越能文庫所
蔵、原懐紙八六九 一九八〇

暮かけて霧も分行小篠はら

男鹿の立所そことさためす

ウ ひとつとなく田面やつくり捨けらし

かたふくまゝのかげの草ふき

あつさままた消ぬ入日の末ならし

打しきりつゝ蟬の鳴山

ふり来るもしはしはかりに雨晴て

風のゆくゑの雲のむらくゝ

明ほのや松の木の間の花の色

鐘もしつけき春の夜の月

御仏のわかれとひよる寺の前

法のこゝろのさそな深けん

思ひ入まなひの道はたゝならて

窓にむかへは白妙の雪

出やらぬうしろの山の朝附日

くもりをさそふすまの浦風

ニ 満塩や磯辺にちかく成ぬらん

浪の音聞寝覚わひしも

一存

春林

桂波

重政

重俊

重幸

玄知

長之

方勝

能順

正方

重次

春林

一存

重政

桂波

重幸

重俊

芦火さへ消つゝくらき晝に

小田もる袖やふかき露霜

今日毎の月にかさねし麻衣

風そ野分に吹かはりぬる

いつしかに虫の鳴音もかすかにて

冬たちにけるみきりさひしき

杉墻のあたりの木の葉散つくし

道たえゝにすめる谷あひ

山水のなかれ涼しき岩かくれ

こゝろの塵もいさ苔の袖

おこなふは世をはなれたる栖にて

ちかひ忘るゝさけのともなひ

ニウ 武士のあやしきこそは舞ならめ

俄に出る九重のうち

跡先に車のわたちつゝくらし

物見の場の漸過るころ

いとへとも霜置菊の色はおし

風ふきあけの浜は冷し

能順

玄知

重次

方勝

一存

正方

桂波

重政

春林

能順

重俊

重幸

方勝

重次

玄知

一存

能順

重俊

友よひて秋の千鳥やみたるらん	重政	朽残る紅葉は水にかたよりて	方勝
月につらなる天津雁か音	春林	時雨ををくる風のはけしさ	正方
しら雲の名残あはれむ明方に	重幸	いつくにか旅のつかれをやすめまし	桂波
したふこゝろもはかなあたる	玄知	かはん馬草そもとめかねたる	重幸
花のころまれの契りも待やみん	正方	しはしたに君はとめて見まくほし	能順
しのふたよりの藤のたそかれ	能順	うき一ふしをいひはるけはや	方勝
そゝきぬる雨しつかにもうちかすみ	重次	浅からすしのふる中の物思ひ	正方
ねくらを出ぬ鳥のさへつり	桂波	こゝろを文にかきもつくさぬ	重俊
三 うつる日も山ふところは寒かへり	一存	言の葉の道のつたへや深からん	重幸
宇治の住居はとふ人もなし	方勝	たれもあふくや此玉津嶋	重政
声は今ほとゝきすきす里なれて	能順	幾筋かかけそへにたる御注連繩	重次
野へのすかるのかよふたひく	重政	こもるいもぬもやゝちかくなる	玄知
下枝まで咲も残らぬ萩か花	玄知	墨髪 <small>（つり）</small> をあらふへき日はあらためて	重俊
いく一むらのすゝきたつ陰	春林	祝ふ年たつ花の衣手	能順
へたつるや霧のまかきの月ならん	重俊	たなひくや今朝めつらしき薄霞	一存
暮渡りたる山ははるけし	重次	春もかはらぬみよし野の雪	重幸
柴人のさそはれてしもかへるさに	重政	川水に影はしつめる空の月	桂波
さゝぬ小舟もはやき川浪	能順	秋のほたるのとふ浪の上	春林

名 芦はらの末もほのかに暮かゝり

けふりにそれとしるき笹の屋

霜はたゝ軒端よりかつ解けらし

小雨のしつくつたふ菅笠

立すかる市のかへさや森のかけ

うちつれつゝもなくむらからす

鈴こさす鷹のゆくすゑ遠さかり

霞わたれる野へは広しも

すみれつむ袂は露にしほれそひ

とふにむかしをおもふ古跡

かしこきかつくり置たる文のうち

治る御代の掟しらるゝ

関の戸や月にもさらになさゝさらん

ゆるされてあふ契り身にしむ

名ウ

夕霧もはれて残らぬわか恨

風もさはきて散し葛の葉

声はたゝあはれなりける蛭

神楽の夜半そ明はなれぬる

重政

一存

方勝

重俊

桂波

玄知

能順

正方

春林

重政

重幸

重次

一存

能順

重俊

玄知

春林

方勝

ましはりのかさねかはらけとりそへて

あるしまふけの時めける袖

裁たてし若木の花や咲ぬらん

うくひす来鳴家居たのしむ

御一句

元林

一

桂波

七

重政

九

重俊

九

重幸

九

重次

八

玄知

八

一存

正方

重幸

能順

〔注〕春林は竹森檢校。元林はその師か。板津檢校正のとほぼ同世代。彼等よりまえの時代の金沢の檢校たちの究明が、今後の最重要課題である。

〈作品一五〉

〔寛文八年九月 正的独吟〕

白山比咩神社所蔵卷子本。
〈目録 五三二〉

今年寛文八戊申の秋九月、板津檢校巽一謹而 白山大権現の広前に、おろかなる懐ひの百句を述て、御法業にそなへたてまつる。其いのるよことは、加越能三国の太守正四位下左近衛中将菅原綱利公武運長久、國家繁栄にして、諸願成就の冥助にまもらしめ給へ。抑、太守ひととなり忠信温恭にして、神明をうやまひ、ふるきをたつね、新をしる守文、諸民あふきのそますと云事なし。是神の照覧に有。夫当社くより姫の尊妙理大権現、此御山は扶桑の良にあたる、千早振神代の昔、伊奘諾尊伊奘冊尊を追て、根の国に出ましくし時、此神御物語ありしを、ふかきゆへあらんと書にしるす事、其理妙なるかな。誠にその神徳大八嶋の外になかれ、ありそ海の浜の真砂をありかすにせんも、猶つきすまし。和哥の道に専此神力をあふく事、奈良の葉のふるきためしのみならず、古今に及て猶たうとみ奉る。宗祇法師此峯によちのはる事有にや、

天照す神のはゝそのみ山哉

是そ誠にくより姫を伊奘冊尊とあふくなるへし。麓より数十里をへて、はけしき岩ね此たち草の中に、われはかほなるはゝそ原数多所に有となん。祇翁是を見ておもひよれるなるへし。又此御山に、菊花の深谷有と南。其したより川と成て、加陽の府に出つ。此水を汲て酒をかもするに、芳き美味あり。飲者齢をのふるゆへに、菊酒といふ。偏に権現の御加持力なるへし。この菊や万代の花の種なるへき神の御名さながら此花にあり。是をよそへて発句となし、広前におさめ奉り、和光同塵の神和をむかへて、つたなきなからもいのる心の誠をしろしめし、ときはかきはに三国の太守の形に影のそふことくに、夜るのまもり昼の守りにまもり、さいわひたまへとそ。

花の名をきくは白山の神代哉

正的

秋の水行谷の八重霧

水を早み霧晴て行大井河
筏の床の袖の露けき

声とよむ岩ねの男鹿月待て

山かつのもて出し花に事問て

嵐の枕かるほともなし

高ねを越る春の旅人

おしむへき都の夢や帰るらん

ニ
うらやまし天路いそきて帰雁

いづくも春の名残とそ成

たゝ一筆の伝たにそなき

下もえのみとりにかはる野への雪

もしきかは思ひしれとやうたふらん

朝日かくれの鳥の囀り

あるにもあらてねのみ鳴比

ウ
煙さへ流の入江遙にて

空蟬の命かけたる露の暮

所／＼の岸の松原

何か常なる世とは見るへき

涼しさに舟の綱手やひかるらん

漕過て跡もなきさの海士小舟

ひちかけ雨のとりあへぬ道

塩干塩満かはる朝なき

やとらはや打過かたき妹か門

芦鶴や声もおしますわたるらん

と絶うらむるけしきをも見ん

川田の色を残す松陰

末迄と思ふ契りは浅からて

一村の薄や頼む岡の庵

君と臣との古き言の葉

垣ねにむすふ秋の初霜

学へ只世をたすくるは文ならし

影ほそき暁月に虫鳴て

月のかつらも遠からぬ影

とりあつめたる別路のうさ

ニッ

何事を逢見ぬ先の物思ひ

うつるはやすき心ならずや

待るなよ日数すくなき春の花

去年より梅のけしきはむ陰

来馴たる庭の鶯啼初て

住家は霞む野をかけてけり

都さへほとりを見れば物さひし

おもひ入てもいかに山寺

さとりなき法の師ならば仕へめや

いける計の人のをろかさ

誰とてもねかはん家を伝へ来て

かきならずよりことさらの声

詠れは月に哀の催され

涙おほゆる衣手の露

三 忍ふてふ事もや秋はよはるらん

わすれ草をはいつつみてまし

住吉のきしもせさらん人待て

御杖の後もかくるゆふして

物いみの過ればやかて行旅に

おほやけことの使かしこぎ

室の戸を出るは老の安からて

いつの古葉の櫛たくらん

手向には其折くの花の枝

住ゐのとけき宮の祝子

春の日の夕を告て鳴鳥

深山の月はいつこなるらし

秋を憂すく吹風を庵の内

馴て野守の露は払はず

三ッ 哀なり袂にすかるきりくす

草むら浅き道そくまなき

煙をも堤の水や越ぬらん

よとむ計の川上の雨

青柳は外山も同し陰にして

木高き限り桜咲色

霞さへかこはぬ砌広からし

野に放飼しつか馬牛

早田うへ麻引比はいとまなみ

暮かたきをもくらす夏の日

数／＼の物見を尽す神祭

中にさかふる氏そことなる

名にしあふ月こそ照せ男山

さそ女郎花よる／＼の色

名
思ひをは誰松虫にかはすらし

そなたの秋はいふかひそなき

野の宮を問も憂世のさかにして

ゆゝしかるへき墨染の袖

しはしたに籠るはかなし笠屋形

冬をしのくも竹あめる垣

霜雪をいかにふし所の鳥の声

憂こそかよへ山深き道

葛城や入といりぬる行ひに

何かいのりのしるしなからん

くすおるなおほけなきをも思へたゝ

人のすくせはしらぬさいはひ

雲井迄すむや明石の浦の月

雁は汀の友ならぬ声

名
舟路には秋なき浪も憐みて

千里の外も同じ夕暮

さひしさをわか宿からと思はめや

問れぬはかり身は古にけり

好みこし花の色さへいたつらに

かへなはこれも春のきぬ／＼

山姫の佛ならし雲霞

たつ年／＼にまさるゆたけさ

寛文八年申九月吉日

板津検校巽一

(正的) 印

筆者

同氏久七郎

直景書

〈作品一六〉

寛文九年正月吉日

小松天満宮所蔵写本

夢想之連歌

玉松もおらんはかたの心くさ

たのしみふかく年／＼の春

鶯のはつねともなふ宿しめて

かすめる野へを墻こむる庭

解渡る雪の下水なかれ出

波にひかりのおつる山風

月もたゝなかめにしろき滝津河

霧もはれゆく岩かねの道

ウ
旅人のたもとぬれつゝ露分て

暮ふかき野にかりねをやせん

里はたゝそことも見えす遠かれや

煙もともにはかけ消めり

雨そゝくたそかれ時は物さひし

山ほとゝきす一声もかな

杉むらを分来てやすむ花の陰

三輪も泊瀬もうちかすむ暮

里／＼も長閑なりける春の空

願主

能順

春林

勝成

重俊

重幸

玄知

章珎

良昌

尚克(ウ)

順

林

成

俊

幸

知

漕も出れはいつるうら舟

はるかにも真砂をかけて満塩に

鶴鳴渡るすゑのあしはら

月は入霜降夜半や明ぬらん

まくらをさむみあらしふくなり

ニ
あれぬれはなを住わふる松の戸に

世をすてし身は心かなしも

聞からにたゝわかうへの祈りにて

かはす契りをたのみをく袖

いはけなきかその生末やまゝならん

おこさん家のまなひしるしも

しな／＼につらね出ぬる和歌

今夜の月をめてはやす友

初雁の声遠からぬ樓の前

消て舟行波の朝霧

海原も浮渡りたるあかしかた

松にはたえぬうら風のをと

春秋もわかすさひしき筈ぶきに

珎

昌

林

順

俊

成

知

幸

昌

珎

順

林

成

俊

幸

知

珎

昌

ニッ
よはひの後ほうきひとりすみ
かゝる世にをくらす中をうらみにて

見し玉かつらおもかけにたつ

あかぬこそたゝ一さしの舞ならめ

いさむすかたもかはる武士

かへらてや幾年をくる他国

都のかたのつてきかまほし

事とへは名もめつらしき水鳥に

さまことにしも池はつくれり

所ひろくうつつしうへたる花柳

まりとてあそふ春のしつけさ

音はせてかすみにしほる袖の雨

あはれ人待ゆふへむなしき

月みれはいとゝまされる物思ひ

来しかたをしもしのふ秋の夜

三
身にしめて聞もあやしき詩の心

しらへそゆるはことさらの声

窓ちかき峯の松風しつかにて

林

順

俊

成

知

幸

昌

珎

順

林

成

俊

幸

知

珎

昌

林

順

珎

端居涼しく立ならず袖

うき事もはらへすてたる御萩川

契りのすゑをおもふ鈴鹿路

忘れしよわするな人も旅の空

別れをおしむ関をくりせり

盃はいくたひ度かめくるらん

かたれはかたる老のくりこと

長夜はさらにねられぬ床の上

さむしろちかくなくぎり／＼す

草／＼のいろもはへある野への月

夕の露そみたれそひたる

三
何となく物うき秋のたちて来て

よそにもれたるあた名くるしき

あひ見ぬをかくさてこふる身ははかな

数／＼にしも文そ書やる

花の枝かつ咲そむるころなれや

うちはへなひく青柳のいと

かつらきや雲にしまかふゆふかすみ

知

幸

俊

成

昌

珎

順

林

幸

俊

成

順

俊

成

林

知

順

珎

珎

風のけしきや雨気なるらん

とまりをもいつちさためん沖津舟

波すさましくよするあら磯

根もたえしうき藻うき草うらかれて

岩間／＼は月くらきかけ

けたものゝふし所にすこき声すなり

つくりすて田はゆきかひもなし

名 生そひて高きかかけの篠の庵

ふりたるまゝに松はかたふく

いつの時うつし置たる宮のうち

屏風の絵こそたゝならぬ跡

横雲のたゝよひにしも明過て

やとり出つゝからすなく山

見渡せは行なも遠き江の波に

うかへる舟は風のまに／＼

釣人や棹をもとらてねふるらん

しりそきぬれば世こそやすけれ

ましはりも恥るはかりの白髪に

成

昌

知

幸

珎

順

俊

林

昌

珎

順

俊

幸

成

林

順

俊

幸

身はをろかなることの葉の道

すみよしの社にたえず詣て来て

難波あたりの月を見るくれ

名ウ
うす霧に遠さかりつゝ鳴千鳥

風漸さむきはま川のなみ

しるへともなれる芦火を焼そへて

小屋はなみ木の松たてるおく

山賤の墻ほの花も尋ねはや

かすみかくれの道のさかしさ

聞にたゝ雉子の声は近からて

いつくも春の日は豊なり

〔以下、編者補〕

〔御〕 一 重幸 十二

願主 一 玄知 十一

能順 十五 章珎 十一

春林 十二 良昌 十一

勝成 十一 尚克 一

重俊 十四

順

知

昌

成

珎

俊

幸

順

知

昌

林

〈作品一七〉

金沢市立図書館所蔵『松雲公採集遺編
類纂』ノウチ「寄藻草 能順」所収。

賦何路連哥

五月雨は高峯や雲のみをつくし

能順

夏の月待河上の山

政長

郭公初音もかなと舟留て

值存

幾ゆふへかは旅の行末

正的

向寄(問也)にやとりも見えぬ雪の中

尚氏

嵐を送る遠の松原

重成

入相の鐘は幽に聞え来て

直信

野中の道はそことしもなき

武旦

ウ 水や唯草村かくれ流るらん

直景

垣根に移る月のしつけさ

執筆

更行に猶しも虫の声すみて

長

枕に近き萩のうは風

順

うら枯の秋にや人を恨むらん

的

恋てふうさや秋の夕くれ

存

其事とあらて泪の一時雨

あたなるをなと頼来にけん

憂世とそ遁れ果てやしらるらし

法になしては身をもおします

只独明石の岡に住残り

吹尽しても松風の声

長雨に心みしかき春の花

春鳥子いにし 「(ヤブレ)」

ニ夕日影野辺の霞にはほのめきて

たれか渡しの舟いそく袖

妹かりの道の川つらたとり着

おもひはきえぬ風の寒けき

夢の後閨の隙もる月を見て

涙添らし手枕の□

冷しきものゝけしきと成はうし

むなしきからは夫ならぬ人

片時も背な親の志

敬ふこそは只天の道

成 氏 旦 信 順 景 存 長 氏 的 信 成 景 旦 長 順 的 存

江を遠み小き舟に押さして

明行浪に釣たるゝ袖

芦の屋の扇に風の通ひ捨

軒端にそゝく雪そ晴たり

ニウ
静なり檜の葉分の朝附日

人も問来ぬこの麓寺

うけはりてしむる野守はいかならん

草の枕は一夜さへ憂

かへりくる方は都の空の月

とこよの秋をしらぬ雁金

作りぬる巢をや燕の去ぬらん

雨こまかなる里の傍
うちけふる竹葉の末の風もなし

堤伝ひの水みとりなり

川橋は渡し捨たる跡許

暮るまに／＼舟そ□たふ

みち遠き花にも望む比良の山

霞の間よりあやし白雲

成

氏

旦

信

順

長

存

景

氏

的

信

成

長

順

景

旦

的

存

三 一声はほとき過ぬ春の空
（脱カ）

遙に雁のかへるあか月

詠れは何くも月の影ならし

露を憐む草葺の内

いと寒く成て猶禱麻衣

いつ別れてのやもめ成らん

夢としもうつゝとも身はおもほへす

かりの使の名残こそあれ

海山の道めつらしき馬の上

関を越てや打出の浜

浪や只流れに遠き音ならん

岩根の小松風ふくむなり

ちらさしと露の玉巻真葛原

契りし秋を□（ヤブレ）□

三ウ
逢まての形見かやとて袖の月

ならずあふきは置やらぬ耳

徒然をいかにしてかは送らまし
口すさひにやおしかへす哥

成

長

旦

氏

順

的

存

信

長

景

氏

存

的

順

信

成

存

長

千代ませとおもふもあかぬ君ならし
色やは替る住吉の松

浦浪に降まかへたる雪の昏

島影さして鶴渡る声

笛の屋の前に小舟やつなくらん

かき集来て藻くつ焼也

見るに只いやしけなるは片田舎

また初なる旅もかなしき

仮寝して別れかたきは花の下

つまで莖をなをめてん色

名 日くらしに雲雀鳴野を分くて

きゝすへにたる鳥の声く

たか袖もけにいそしきは仕へ人

車かけんのをひとけぬめり

待遠に有しも遠に生し立

猶も千尋と祝ふ髪そき

ちかつけるよそひゆゝしき内参

水むすふなり此五十鈴川

順 旦 景 的 順 長 存 景 的 信 長 存 成 順 氏 的 景 旦 順

昏るより松の響や高からん
一通して晴るむら雨

影見えてたなひく月の薄霧つたぎ

消残りたる夜半の稲妻

風の音萩に涼しき端居して

打はへつゝもならず爪琴

名ウ 黄昏の笛に哀やこをるらん

宿も定ぬ海士の漁

塩満て猶はなれそとなりけらし

友まといつゝ衛声する

御狩野の嵐に花の雪散て

霞の隙にならふ芝のは

長閑成袖の行すりいか計

都の内の春そいたれる

能順 十三 重成

政長 十三 直信

値存 十三 武旦

正的 十三 直景

十 十 九 九 九

長 氏 的 順 信 成 存 的 景 旦 順 長 成 信

直氏 九 執筆 一

〈作品一八〉

小松天満宮・北畠宮司家所蔵写本
『快全・能順等百韻連歌集』

元禄四年六月七日 於小松

何衣

雪遠く夏川流す白根哉

元故

雲間涼しく通ふ山風

瑞順

稻妻の影珎しき秋立て

能順

夕はかりの月仄か也

故

一時雨露や名残に過つらん

瑞

いまた梢の色もかはらす

能

のほるへき光を籠る朝曇

故

鳥の翅の飛消る空

瑞

ウ
浦よりも見ゆる小鳥や遠からん

能

舟の行衛は夕日とそ成

故

柴人の棲の烟幽にて

瑞

木間稀なる一村の陰

能

若葉にも有とや花の匂ふらん

故

露の上吹風の折／＼

瑞

いねかての床は夜寒に移ひて

能

月も問ぬに恨られけり

故

泪猶袖に懸行雁の声

瑞

思ふ其方の玉章もなし

能

見え初し今朝や心もとめさらん

故

やかてかくろふ富士の浮雲

瑞

武蔵野も安く廻れる冬日に

能

萌し若葉も霜かれの頃

故

ニ
幽なる水にも駒や窠らん

瑞

岩根こりしく道の行末

能

隔れは重なる山の心地して

故

逢見て後そ恋は増れる

瑞

難面しと恨みてなとか捨さらん

能

うき世なからの命甲斐なき

故

待付て時めく人は羨し

瑞

誰我物と植し花園

能

古ぬるも春や知らん志賀ノ里
初鶯の来鳴曙

故 瑞

あくかるゝ梅か香いつち咲ぬらん
暗部の山路たとり行春

故 瑞

出て見む薄雪洒く野辺月

能

三 降おける雪は音羽の峽なれや

能

嵐もくらしき村雲の空

故

朝水する水の水上

故

入相の鐘鳴方は杳かにて

瑞

陸人の袖寒けなる川橋に

瑞

舟帰る江の水閑かなり

能

秋風凌き里や問らん

能

ニッ
塩こゆる限りや波の噪らん

故

深草や陰を鶉のよすかにて

故

芦辺の末に残る日の色

瑞

露こそ月のやとりとはなれ

瑞

方寄の稲葉計に苅捨て

能

荒にけり何かは泪の跡ならん

能

雀群起秋の山本

故

もし尋ぬとも方はたかへり

故

起出る里は夜深き朝霧に

瑞

思はずの名は誰為の|もうからまし

瑞

思ひ入ぬる月の手枕

能

さかなき人そ世にはあやなき

能

心あらは夢路に人も通はまし

故

有なはとしたはるゝしも先達て

故

よそ目の関はせん方もなき

瑞

桜散ても春は残れる

瑞

八十瀬をも渡れば渡る鈴鹿川

能

山里の藤の黄昏来ても見よ

能

駅伝ひの遠くなる跡

故

旅寐するとも雨の長閑さ

故

此殿の声も仄かに明過て

瑞

三ッ 夢の間の枕もかさはからまほし

瑞

霞たな引庭の松風

能

道の行てに問試む

能

儂くも此夕こそ頼なれ
 賤か焼火の烟すくなき
 皇は代の恵をも思へかし
 跡を垂ます伊勢の神垣
 絶やらぬ御裳濯川の末懸て
 水の清きに月も晴行
 秋の夜に衛声して更渡
 いとゝ露けし帰さの袖
 かく計いとはれんとはいさしらて
 向後の契りいかゝ見つらん
 馴にける主な忘れそ春花
 東風も都の便にそ待
名また解ぬ軒のつらゝに宿冴て
 日影なからに雪は打散
 身を侘て聞えあけぬる和哥
 哀をしりて罪ゆるすらし
 化めくも若き程こそ習なれ
 俳計恥ぬ心そ

能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故

移すへき月かはかゝる袖の露
 夕風なひく薄村々
 しほれ行花野の秋は物さひて
 宮るも仮に小柴ゆふさま
 住なすもまた此比の里ならし
 人古たるそ驚かれぬる
 卒都婆のみかくて見んとは思きや
 等閑にして過し悔しさ
名言葉の多き方にやひかるらん
 物あらかひも心よはしな
 春秋も時に付たる詠して
 馴れはむへし住吉の浦
 笹屋もかたふく海土や帰らん
 入日の影の遠の松原
 鎮れる嵐の花は雪晴て
 山ふかけなる鳥の囀
 執筆

能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故 能 瑞 故

〈作品一九〉

小松天満宮・北畠宮司家所蔵写本
『快全・能順等百韻連歌集』

元禄四年七月

何路

下萩の声聞あへぬ柳哉
 月仄なる夕露の庭
 立登る外山の霧に雨晴て
 落行水の末杳か也
 河風や明るまにく音すらん
 幾村竹の生つゆく陰
 作る田も其程くんに置て
 往還ぬる里人の道
 初雪の降と見ゆるも只暫し
 打羽吹つゝ鳥や鳴らん
 指出る影も限なき朝附日
 江の水遠くうかふ釣舟
 山本の松一村を栖にて
 絶す時雨る秋や侘しき

政右 政右
 応信 武康
 正及 武包
 知由 能順
 正晴 能順
 執筆 右
 信 右
 康 及
 包

声立てかよふ雄鹿の夕く
 猶恋しさを月やすむる
 歴し夢の何しに覚つらん
 我独寐の枕もそうき
 霜は只払はぬ儘に積添
 木葉隠の幽かなる道
 散残る花の林に尋入
 春の鐘なる山寺の暮
 二心より長閑からまし桑門
 たもてはたもつ命也けり
 危も忍ふ思ひを尽し来て
 われてあふへき便をそ聞
 深(フカ)しも頼よりぬる占方に
 おもむく道や日をえらふらん
 風荒る程は湊に舟留て
 見馴るゝからに憂海士の業
 芦火焼烟に月はかき曇
 淋しき秋や松陰の里

由 晴 順 信 右 康 及 包 由 晴 順 信 右 康 及 包 由 晴

紅葉するあたりに人は問寄て

乗捨にける道の小車

急ぎぬる行衛や駒に任すらん

漸暮過ぬ待もこそすれ

ニッ おもはずの障有ともいさ知らて

文の返しも何願ひけん

化めける人には身をもまふらすな

語らひぬるも友にこそよれ

大方は明しかたくも長夜に

老と成ての月にそ有ける

露ふかき草の扉を指やらて

今朝まで賤か早田守らし

物すこく嵐音する岡の辺に

雲幾重とも越残す山

末遠み日も暮にけり旅の道

宿りを出は曙にこそ

鶯の誘につれて花は見ん

野は霞こめ分ぬ遠近

三 音立て水の氷や流るらし

今もや田子の打返す頃

山際の若草靡き雪晴て

夕の光閑かなる空

稲妻に誰初秋を告つらん

待て雁もや聞ん手枕

心なく寐ぬへき月の今宵かは

忘れやすると驚かさすや

事ゆかぬ中は使のかひあらて

つらくとも只知せてしかな

難面て替りぬるこそ恨なれ

哀命のなせる俤

種蒔し花の此春咲初て

立や千年をことふける宿

三ッ 円居して霞や酌もかはすらん

水の清きに望む閑しみ

鱗の心しるこそ恠しけれ

岩をはなれぬ鷺の一つれ

康

由

晴

及

右

順

包

晴

信

康

順

右

及

包

由

順

右

及

陰高き松に日影や残るらん
雲を誘ひて過る急雨

薄霧の気色も秋や来にけらし
蛸の鳴_下かたはらの上山

月しはし立待れぬる柴庵
たと／＼しさや問帰る道

はかなくも夢を頼むる現にて
むなしき色をいかてしらはや

説置し法の心や深からん
三井の水こそ底も澄けれ

名
暁の影にし鐘の声冴て
霜夜の嵐鎮れる空

人も早ぬるやと忍ぶ通路に
同じ思ひや誰もうからん

鳥部山一筋ならぬ烟にて
残るも哀れ草むらの露

槿のしほれし籬荒渡
野分の風に秋も更行

康 信 晴 由 順 康 包 右 信 晴 及 順 信 康 包 由 順 及

松虫はかるともかれめ蟀
猶うきにしも馴ん小庭

仮初のと絶なからに程ふりて
うつろはんとのかことなるらし

おもほえず恨らるゝは寛東な
身は数ならぬ物と知つゝ

名
玉匣二人の親を悲しみて
そはん心も打乱れ髪

又君に仕はせしと思ひ取
罪にあへるも宿縁ならまし

花やかに榮る人もいつ迄そ
藤咲頃は問もこそすれ

暮毎に待るゝ春の子規
打霞みつゝ空そ閑けき

〔浅井政右〕右 十一
〔湯原応信〕信 十三

〔菊池武康〕康 十三

晴 順 信 康 包 晴 順 包 由 晴 及 右 信 康 包

〔知由〕由 十一
〔正晴〕晴 十三
〔能順〕順 十四

〔由比正及〕及 十二 筆 一

〔菊池武包〕包 十二

〈作品一〇〉

小松天満宮・北畠宮司家所蔵写本

『能順・快全・飲生等連歌書留』

〔元禄4年10月5日〕

浄山玉清大姉九十あまり五かへりの春秋を経

て、神無月五日に終取給。惜へき齡ならねと

親の事なればさも思はれず。遠き境をさへ隔

たる別の歎き計を発句にして、独吟にと思ふ

に、瑞順両吟を望しかは、志をおなしふして

百韻をつらねて牌前に手向となす物ならし。

はゝ木々のあはてむなしき落は哉 能順

詠る空も時雨降袖 瑞順

影寒き板間の月の秋更て ○ 能

小庭近く虫の音そする ○ 能

仮臥に明すや夜半も長からん ○ 瑞

越残したる関の戸の道 ○ 瑞

山風にうかへる雲の引捨て

夕日いさよふ急雨の跡

竹のはの露冷しく打乱れ

垣根続に水落る声

人も来ぬ草の庵は閑にて

焼火伴ひ冬や送らん

いとふかく積れる儘の雪の中

松のあらしの絶ぬ山かけ

花紅葉心尽しの折／＼に

いつ玉草を哀とも見ん

今更に恨み果へき思ひかは

身のうき事も堪て来にけり

消す猶あやしき物は命にて

逢やと時を待もこそせめ

七夕の一度契る月の夜に

雲井の風も秋は珍し

初雁のいとしも早く音にて

今はた薄穂にや出らん

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

能

瑞

○

能

○

瑞

○

能

問はやな古にし里の露の暮

独り詠る思ひもそ憂

人しれぬ我片恋にあくかれて

通ふも夢は何の甲斐なき

明日るをもまたてし帰る度／＼に

物悲しくも千とり鳴也

浪の音冬に成行須磨の浦

海士の笹屋に籠る塩風

かくてのみ左迂る身の哀しれ

何か世に経る便りとはせん

泪そふ老は月にもなくさまて

雨を聞夜はことに冷し

芭蕉葉の軒端を近み打戦き

寺はとひ来る人も稀なる

御法にはなとか心のうとからん

目の前にある悟とそいふ

根にかへり又咲花の春毎に

巢をはなれてや鳥の鳴らん

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

山寒き日影も替る朝霞

嵐の程つらわ雪も散つゝ

かこふにも柴の扉はまはらにて

一重を頼む麻の小衣

夏の色秋も闌ぬる旅の空

猶行／＼て陸奥の月

身に入や都の方を忍ぶ山

おなし声をも聞ほとゝぎす

三 槽に昔覚ゆる里に来て

かわらけとれる袖の恠しさ

読歌の心はへさへなまめける

いか計とも見ゆる生先

御園には尋常ならぬ種詩て

泉のなかれ猶ぬるむ春

ふしつける川瀬の波も打霞

みとりになひく柳むら／＼

月影も結ひこほるゝ今朝の露

鉤簾のひま／＼のこる秋風

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

くゆらかす其香床しき菊の花

佛見はや衣のおとなひ

打つけに人をは恋ん物ならて

化名立ては悔しからまし

手枕は更て夢共おもほえず

鐘に驚く野への片敷

いつのまに月は霜夜と替るらん

かれ葉寂しき庭のむら荻

夕されは人も影せぬ山里に

柴かり捨て立帰るらし

おくれしといそく汀の渡し舟

今日の舎りはまた遥也

苦しくも降来る雨をいかゝせん

おもひ絶はや問かたき君

主つよくなるを忍ふもあちきなし

心なかくて隔置つる

有増の山路の花はいつか見ん

つれなや去年の雪の松の戸

名 春の水岩の下行音はして

霞をわたる橋はあやうし

乗駒も昏る間に／＼つかれ果

問むあたりに心先たつ

笛の音を聞ても忍ぶ程は知

言は伝ん便もそなき

胸よりも胸の内なる其仏

まよへは月のすめる暁

白露を残すや窓の小夜時雨

外面の櫓の散尽るかけ

夕／＼間近く鹿の声立て

あはれとこそはおもひ入山

君か代の祈や深き室の袖

齡経ぬるとゆるす小車

名ウ つらなれる人は露路の跡先に

かさす青柳花のいろ／＼

此殿の声も長閑に打添ひて

友鶯の馴るゝ玉垣

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

○

瑞

○

能

移る日の影にこてふや遊ふらん

○

寐覚もいまた深き夜の空

順

霞める露はいとしつか也

瑞

冷しき軒に霜降月落て

忠

世を歎く袖の気色も打忍

○

古たる里の秋の哀れき

胡

御名を唱て頼む彼国

能

憂身をや衣擣てやも恨らん
おもふを遠き旅に待つゝ

順

〈作品一〉

小松天満宮・北畠宮司家所蔵写本

『能順・快全・歎生等連歌書留』

〔元禄五年正月十八日〕

何 船

能 順

打も頼まは世はあちきなし

胡

晨明の夜な^{宵イ}霞む行衛哉

能 順

言のはや人をなつくる為ならん

順

梅か香になる窓の下風

直 忠

あいそははやと思はるゝ友

忠

青柳の雪の白露こほれ来て

元 胡

驚も尋る花の山踏に

胡

仄めく光認る朝鳥

順

名残すくなき春したふ比

順

川波の音も汀に冴渡り

忠

二 詠ふる夕の霞袖ふれて

忠

爪木つみてや舟かへるらん

胡

月に心をしられもそする

胡

山本の末の一むら日は暮て

順

憂人を夜寒の床に待やみむ

順

嶺のあらしや雲に吹立

忠

夢をな吹そ荻の上風

忠

ウ 何所より鐘の響の伝ふらん

胡

寄波のあらし濱辺にうらふれて

胡

網引の海人や立帰ぬる

焼出る芦火仄にくれ渡り

竹の戦きや雪洒らん

冬籠る物の淋しき庵の内

捨ぬる身にも春そ待るゝ

咲かは若君や来まさん桜花

思ひ霞めん便たになき

望をもいかてしられん県召

いきほひ有に随ひてまし

ニッ
あらそふは苦しき物を国中

遠き境に行やはなれん

幽なる宿の梢を願て

残れる庭の昔ゆかしき

高き名の滝の音にも聞ゆらん

水もらさしの契はかなや

逢夜半に時の移るを悲しみて

問ふをおそくと心わかるゝ

今のはや打こそ出め我思ひ

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

有侘にけり此里の秋

山深み尾上の嵐鹿の声

月の哀も夕暮の空

霞ますは花も一重の色ならん

長閑き程は雨もいとほし

三
忍ぶへきよすかも春の暮毎に

はつかにたにも垣間見えまし

住残る古郷人のいかはかり

世を捨はやも心よはしな

おのつから待るゝ君かうつくしみ

愚なるわれ身をは頼まん

忘るへき教は筆に書付て

結ひまほしき玉川の水

月をみは只萩か枝の上の露

虫の鳴音に枕からなん

秋風の袂涼しき端に出て

朝の姿したふ衣く

いかにとも名のらぬ行衛性しまれ

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

順

順

忠

胡

ゆるささりけり守る関の戸

三ウ 鳥もまた明果ぬ間や遠からん

幾起臥に侘る寒けさ

小笹原霜枯る迄片敷て

行ケとも末は知らぬ武蔵野

首途して先こそ物は悲しけれ

空しき道に身は近付ぬ

心にも得るやと法に入初て

深山の庵に住てしも見ん

月も猶空に増らん郭公

一通りせし急雨の跡

待方の心〈思ヒ〉に又も成けらし

憂は別に尽し果つゝ

散は咲花〈も〉に今はの春の昏

山の奥にもかすむ入相

名 去年の風いつしか雲に納りて

帰り行らし天津雁かね

月残る田面の水の明渡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

露もむら／＼霜の白菅

霧なひく岩の下道幽にて

先立人の声も昏けり

終取は限りに鐘を打ならし

乱れぬや猶心なるらん

色めけるあまたか中に立交り

只にはあらしやつす小車

志かたはいつくそ前渡り

雨舎りせよしはしたに見ん

此夕惜しまは爰に花の陰

遠〈き〉に春野を分尺す袖

名ウ 末や猶二村山のほとゝきす〈覆むらん〉

漸はた照射更て行影

物すこし里離れなる草枕

旅は誰にか隣れまれまし

知人にせはや出来し都鳥

古き難波の事も問ひてん

才の程心の深〈き〉き如何ならん

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

順

忠

胡

あつかりにける世の政

喜悦

〈作品一―二〉

小松天満宮・北畠宮司家所蔵写本

『能順・快全・歛生等連歌書留』

元禄十二 正月

山 何

夕月夜梅か香細き野風哉

霞に霧も散まかふ空

遠く成白尾の鷹の跡見えて

駒行道や明渡るらん

立波の浅瀬寒けき麓川

枯葉戦めく岩の小薄

入日影残して人や帰るらん

そゝく雨気の暫し鎮まる

ウ 露深き軒の浮霧棚引て

かよふまに／＼昏る秋風

稲妻や月の光に移るらん

虫の鳴音もよはるくさむら

古き跡とへは泪も催され

無人の日の廻り来ぬめり

有増に思ひし形替てまし

忍ひよらんの昏に成道

兼言のたかはゝいかにつらからん

頼むけしきの心くるしき

化なさを下に籠るはいふかした

齡の程もいと若き人

唐衣かさしの花に色明て

かすみな果そ黄昏の露

ニ すかりぬる色のでふのはかなげに

住捨にける里の寂しき

晨明の月の詠も秋過て

夜寒にも猶独り寐よとや

夢をたに結びもあへぬ萩の声

仄見し行衛忘れもせず

かく計成ぬる契いかなれや

今のうきよりおもふ前の世

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

まよはしと願ふは後の闇路にて

祥

問来ぬる春や人をも分さらん

全

此山寺にいさなはれぬる

全

恠しきすかたかすむ雨の日

全

桜花木深き峯の九折

全

三 遠かたの山よりも先昏初て

祥

霞の中に入袖やたれ

全

野辺の色にそ秋は残れる

祥

春雨に忍ふ便の里ならし

祥

消果ぬ暁月の影寂し

全

鐘の声して思ひそふ昏

全

雁や行／＼遠さかる声

全

ニッ 存命をいつの日迄か歎かまし

全

我やいつ帰りみやこの友ならん

祥

それと頼みもあらぬ侘人

全

思へは命頼かたしな

祥

立よれる陰の柝葉打散て

祥

かたらへる詞の末に打詠

全

音も時雨る松風の山

全

歌はさまうきふしや有らん

全

更る夜の哀や庵の月ならん

全

ゆるしなき其契こそ恠しけれ

祥

古事かたり身にそ入行

全

尽す恨を試んとや

祥

絶置る露の恨を悔返し

全

なつるてふ岩の生先代に懸て

全

思ひ定る其方もなし

全

深き恵みを思はぬもやは

全

とり／＼に言寄心浅からて

全

色そはる草木の上の春の露

全

泪をのみそ我は見すへき

全

風も霞める朝明の山

全

交りも恥し今の老の袖

全

三ッ 牙／＼し谷の鶯日に鳴て

全

一木の花を植る蓬生

全

陰は氷の残るむら柴

全

音立る水を庵のかたはらに	祥	さりと共と其暁を頼みにて	全
夜深き小舟誰か指らん	ゝ	借し今宵の宿の侘しき	ゝ
月入て妻迎ふなる天川	全	傍臥の花にすさへる風の音	祥
気色涼しくなれる秋風	ゝ	移り行らし春の朝とり	ゝ
袖に散露の玉垂巻揚て	祥	長閑なる白雲なひく水晴て	全
昏行まゝに人そ待るゝ	ゝ	入江の上に高き青山	ゝ
必といひししるへのいかならん	全	廻りぬる余波夏なき昏の雨	祥
夢もらさしも心あやうき	ゝ	帰るさになる野路の休らひ	ゝ
親にしも似かよふ筋は紛めや	祥	立のほる煙を猶も憐みて	ゝ
うち調るもことさらのこゑ	ゝ	けたぬ思ひを問よしもかな	全
波も今朝改れるか花の春	全	待夜半の積れる恨いかゝせん	ゝ
桜を送る比良の山風	ゝ	只かた／＼に身を分まほし	ゝ
名 雁そ鳴空にや帰残るらん	祥	遠近も今盛なる秋の花	祥
仮寐の月のまたき曙	ゝ	行帰りつゝ小男鹿の啼	ゝ
露計心留たる様ならて	全	露も猶降増りぬる此里に	ゝ
はしり書ぬる文は冷し	ゝ	晩稲の田面芴やとるらん	全
すくれつゝしゐつる業の片ゆつり	祥		
まつしき身にも仰御仏	ゝ		

〈作品一三〉

金沢市立図書館所蔵、写本
〈目録 特一六九—一二二〉

元禄十六年九月十八日

横山外記殿

花何

村薄まねけはなひく小萩哉

踞道

虫鳴夕月出る庭

能順

秋風の籬の露にみえ初て

瑞順

いつしか野への霜に成覧

正武

片敷て寒さおほゆる草枕

定連

覚にけらしな旅の夜の夢

直景

鐘の音明方近く移ひて

一友

雲こそかゝれ遠の山の端

長元

ウ
いつくとも知ぬ行ゑや子規

尹房

木々の若葉の深く成ぬる

元為

暮るより涼しき露の打乱

執筆

簾をまけは風かよふなり

四道

別ぬる人の袖の香したはれて

五順

なつかしけにもいひし一言

浅からぬ心の程は忘れぬや

つらきをおもふ我や何なる

恵には猶長かれの命にて

かゝる時代につかへ行らし

心はへふかくよせぬる和哥

ぬさ取あへぬ此神の前

花咲る杉間の月も殊更に

霞める山の明ほの春

二
帰るとも名残はあれた天津雁

引さしなんもおしき琴の音

恥ぬへし今のかいま見知すなよ

いひもよりなは浅しとやせん

日を経ても壁にむかひて送る身に

頼む隣の夜半の灯

さむしろの寐覚寂しく更／＼て

月なき空に聞雨の音

木葉をやおり／＼誘ふ秋の風

瑞

武

連

景

友

元

房

為

順

一

道

景

二

景

三

順

為

四

為

四

道

五

房

六

房

七

瑞

八

順

八

友

九

友

友

打や砧におもふ旅人	十道	おれるつゝしや家つとにせむ	四元
肌寒き比しもなとか別けん	一連	三 永日を暮しかねつゝ出る野に	一道
恨らるへき事はおほえす	二元	晴間もまれの頃の雨	二瑞
なれかほに近付ぬるはいとあやし	三順	おもはずはいかてか人の音信ん	三順
猶も心の奥そゆかしき	四武	しはしたゆとてさのみ恨そ	四為
ニウ かたらへる其言葉の多からて	一順	なをさりのたはふれ事はあらしやは	五景
道を得にける人のかしこさ	二房	かけはなれぬを本意となす中	六道
馬にても任せてしのく雪中	三順	めならばゝ末いかならん玉かつら	七連
知ぬ野原はいつく宿らん	四道	枯なんはおし露の真葛葉	八祖
夢にこそ憂かりふしもなくさまめ	五連	松虫の声を憐む暮毎に	九順
いたくな吹そ袖のさ夜風	六為	月のみ独すめる古跡	十友
橋のかほれる月は猶あかて	七瑞	はかなくもなにはの事の事去て	一道
軒のあやめを茨そ添たる	八順	うかひても世を渡る舟人	二順
あれてしも住めは住るゝ賤か屋に	九正祖	行急をも知ぬ恋路を迷初	三瑞
宮作とて何驕るらん	十景	それとみえなは玉むすひせよ	四順
苦しむる心にえやはなつかまし	一連	三ウ かへさるゝ現に習ふ夢もうし	一連
またはし鷹の手にもたまらす	二祖	おもふかゆへと身をや恨ん	二道
椎柴もましはる花の山越て	三順	情たにあらすは命かゝらめや	三順

たよりうしなふ老そかなしき

四景

散やいつれの紅葉なるらん

八連

曉に成行空の月落て

五瑞

檜檜原下行道の山深み

九順

うかれ鴉の声は冷し

六順

古渡りたる寺の閑けき

十景元

とふ里も知ぬ山路の初嵐

七連

おこなひの声は幽に聞え来て

一為

雲のはやきや時雨もそする

八瑞

此世の後の契たのめる

二瑞

浦波の音も今はた冬たちて

九順

いかにせん明日知ぬ身の物思ひ

三房

筈ふく住るいかに侘しき

十房

かはりやすき(ママ)うき人心

四順

わつかにももくつかきつめくゆらかし

一為

名ウかひもなく立名はおしむ習ひにて

一武

つゝくもほそき松陰の道

二瑞

一度たにもあはてやみにき

二景

世の外に住る岩屋は花もなし

三道

鹿子待ともしの影も明る夜に

三順

のとかなる日に春ぞ知るゝ

四武

草村しけき夏の山本

四祖

名うす霞立またれぬる年越て

一祖

汲にける跡たに今は忘水

五連

雪間みえたる遠近の山

二順

所かへてや里はしめぬる

六道

谷川に落来る水や音すらん

三景

竹垣も心あるへき花植て

七瑞

たゝく水鶏の夜もふかき比

四瑞

いと珍しき鶯の声

八元

有明の月さやかなる夏の空

五順

〔句上編者補〕

あつさも消しうたゝねの袖

六友

踞道 十三

一友

五

おはしまに出来は風の吹はたり

七道

能順 廿二

長元

六

〈作品一四〉

瑞順	十二	尹房	六	定連	十	執筆	一
正式	五	元為	七	直景	八	正祖	五

宝永四丁亥十一月廿八日

能順大徳一周忌為追善

小松天満宮・北畠宮司家蔵写本
『能順・快全・歎生等連歌書留』

独吟百韻影前に備へ侍る物ならし

1 氷るなよ見し人影の水の月

観生

去年今月今日、能師かくれます、悼に、神の巻兵部卿の哥ニ「陰広み頼みし松や枯にけん下葉散行年のくれ哉」といふを「有し世に頼し松や雪の底」と発句して手向侍る。又此一周忌にも、其巻其折の哥に「さへ渡る池のかゝみを」と源氏のよみ給ひ、又「年のくれていわるの水」と王命婦か返哥など思ひよりてつかふまつりぬ。此卷にて発句せし事故有ましとかや。

〔番外三〕桐壺源氏也。後榊源氏哥。「さえわたる池のかゝみのさやけきにみなれし影を見ぬそ悲しき」

大和物ニ「池はなをむかしなからのかゝみにて影見し君の人かなきそ悲しき」

「年暮て岩井の水も氷とち見し人影のあせも行かな」 源ニ王命婦か哥也。

2 枯て哀の増る浅茅生

無跡のさま也。さらてたに浅茅生は悲しきに、枯わたりて哀もいよく増りたる也。

3 風戦く小野の笹原霜降て

「あさちぶの小野の笹原」とよみしは古跡の事にてあらず。只浅茅也。風霜の風景くはりて、哀もまざる也。古跡にしてまた付れば、三句めむつかしき也。

4 また朝鳥の声ほのか也

朝霜を羽吹あへぬ小鳥成へし。

5 狩衣春の心や誘ふらん

朝といふより春のかりおもひより侍る、狩衣春とつゝけたる迄也。鳥の声に誘れ出る也。

6 真柴つたひに霞み行道

狩に真柴よみたる哥不可勝計。不弥狩場の道なるへし。

7 消残る雪の山本幽にて

むら消の雪の山路の躰也。

8 嶺の夕日の薄くなるいろ

夕日の消残る也。

ウ 舟帰る遠の江の水かき曇

夕陽に、舟帰る江の曇渡りて、日の影うすくなる也。

2 松立陰や栖あるらん

松陰の巖に所く石すへの古残りたるはむかし栖や有らんと也。〔この註、次の句3のものか〕

3 〔3句目ならびに註、空白〕

4 ゆゝしきならの都ゆかしき

5 天の原遙に月の指出て
すみれ咲ならの都の跡みれば石すへのみそかたみ也けり。ならの都のゆゝしかりつるを思ふ也。

天原ふりさけ見ればなり、見る月発句にあれば、成かたくてかくなん。

6 雲のいつこに雁の鳴らん

月待出で、雁も鳴渡なるへし。

7 いとゞしく秋風さへに打時雨

秋風さへ悲しき時雨打添て降比、又雁も啼で、いよ／＼秋を侘るなるへし。

8 誰に問れん夕ともなし

秋風にさへ問ましきに、まして時雨る夕、誰にか問れんと也。

9 相おもふ独のみこそ恋しけれ

思ふ人こそ問へけれ、誰にかはとはんと也。

10 今めかしきは心とまらず

思ふ人に別れて後、人をむかへて見れとも、心とまらずと也。恋しきをむかしの事にして付侍る也。

11 取出るあたりの調度様／＼に

調度のすかたもむかしおほえてやすらか也。今やうの異さま成は、無下におとりたるなるへし。

12 ひいなそあかぬあそひ也けり

ならまし
イ
離の調度とも申さるへき歟。

13 いざさらはいざなひ行ん花の宿

ひいな有所也。いさ給へと、むらさきの上を、二条院へ誘ひ給ふと見えたり。

14 けふこそ咲め其園の梅

園は居所より聊立離れたる所也。いさ行んと也。

二 玆しく一夜に年のあらたまり

元日なるへし。

2 白き頭そ驚かれぬる

一夜白髪玆しき事なるへし。年齢も改りて、老人となりたる也。一夜白髪其例あり。また、昨日少年今

日白頭と作れり。

3 聞しにも増れる雪の富士の根に

聞しにまさりておとろく計也。見事也。尾もしろしかしらもしろし□□とりの雪のふしの根時しらぬ山

4 むかふ嵐の声のはけしさ

きゝしは声也。嵐の音よりも、むかへは猶はけしき也。

5 いかりぬる有様更に只ならて

人のいかれる嵐也。声は人の声なるへし。

6 あらわれ出し荒海の魚

あらうみのいかれる魚のかたちと箒木にあり。

7 御代もかく治れる波の船中

周の武王の舟へ魚の入し事見えたり。哥ニ 白き魚御舟の内に入しこそ治れる代のしるし也けり

8 君を仰げる其さゝけ物

難波の君もきこしめす、四方の国よりたてまつる、御調の舟は堀江より、下略す。異国より来て仰き奉る也。

9 心はへ面白き詩をいひかはし

高麗人のひかる君とあふきて、捧物などして、詩を作かはして と見えたり。

10 影更るまで酌るさかつき

琴詩酒の友也。月を見つゝ、更行迄、詩を嘯き、酒酌^ち、夜蘭成も忘侍るか。

11 秋の夜のともし火近き新枕

新枕の夜、盃とりくゝに更行なるへし。影更るはともし火也。

12 たかへにけりと人そ身にしむ

新枕に灯近くみれば、かねて思ひし人にあらず、人たかふにやとたとる也。

13 門に来てたゝかん誰もおもほえず

我門に来ん人はおほえぬほとに、さては問たかへてたゝくかと也。

14 吹風すこき此深山守

人の来へき深山ならず。門叩くは風なるへし。

二ウ 落葉する森の下道物古て

前句は、深山守ゆへ、吹風もすこき也。付句は、古渡りてすこくなる折く、払ふものもなくて、落葉に道も埋もれ侍る也。

2 はかなき名のみ世にはとゞまる

墓所なり。木のはにうつもれたる様也。「森の木たちこふかく」など、須磨の巻にも見えたり。

3 恠しきやうかへる水の淡路島

あわち島といふ名は、はかなき名ながら、世にとゞまる也。此島は秋津洲の初とかや。一滴とゞまりて島となれる、あやしき也。

4 漕出にけり波の釣舟

うかへる釣舟也。あやしき迄漕出けりとなり。

5 左迂る身のうき歎告まほし

わたのはら八十島かけて漕出ぬと人にはつけよ蟻のつり舟 とよめる。左迂の時とかや。

6 あはれをしらは捨ん所縁か

所縁にも捨られてさまよふ身の哀さ、告しらせなは、さすかに捨しと也。左迂は流浪也。夕白の巻にも見えたり。

7 摘残る草もみながらむらさきに

むらさきのゆかり也。「むらさきの一本故にむさしの草はみながら哀とそ見る」とよめり。哀もしらは摘残さしと也。

8 すみれも咲る花の木下

紫はすみれ也。花の咲比、木陰の葎も草むら交りに咲ける也。

9 荒にける跡たに春はなつかしみ

荒たる跡といへとも、春はさすかになつかしき也。木の下にすみれ、めつらしからぬ付合也。なつかしきとも読る。

10 かたふく迄の月そかすめる

「月のかたふくまでふせりて」といせ物語に見えたり。「比はむ月十日あまり」と有。

11 問来すは寐なまし物をほとゝきす

問ぬ物なくは寐なまし物を、月のかたふく迄、子規を待ふかしけると也。寐なまし物を小夜更てかたふく迄の月をみるかな

12 雨夜をすさふ友そ嬉しき

問来すは寐なん物を、友の来て、雨夜のつれなくさむるゆへに、子規も聞たる也。

13 有し其品あまたにも語り出

雨夜の品さため、人のよく知る事也。

14 悔むに罪もみな消ねたゝ

罪消懺悔也。上品中品下品とて、三品の懺悔有。

三 聖にし逢ぬるえには浅からて

かしこき聖にあひて懺悔する成へし。

2 思ふかもとに文書てつく

宇津の山越にて、修行者に逢ける也。

3 あはれめよ二人ならはの旅袖

二人ならばかやうにたひもうかゝりしをと、思ふ人のかたへ書やるなるへし。

4 一重の衣いさ敷て寐ん

遍照か返し 「世を背く昔の衣は只ひとへかさねはうすしいさ二人ねん」

5 月に猶涼しき風を触くくて

一重は夏衣也。涼しき風をふれくくて、いさねんと也。

6 花たちはなの香ほり深しも

たち花のかをふれくくてあかぬ心也。

7 問よりて忍ふむかしの人もうし

むかしの人と盃せんといひよりけるに、はかなくて、橘とりて「五月待花たち花のかをかけはむかしの人

の袖のかそする」と見えたり。

8 石やむなしきかたちなるらん

石の形代也。草の原を問よりて 昔の人を忍ふ□ □のみ其人のかたちなるへし。

9 降は飛雨の燕のはかなげに

ふれは飛ふらねは本の石となる雨や燕のいのちなるらん

10 返し捨田の水の淋しさ

春の田面の躰也。

11 芦垣の去年の古葉に風見えて

古はの残れる芦垣□ □風のさひしきありさま也。

12 難波の事も只夢の春

いにしへの難波の春は夢なれや声のかれはに風わたる也

13 世の中は舞たはふれてすぐせかし

夢の世の中にて有ほとに、舞たわふれてすぐせと也。「難波の事か法ならぬあそひたわふれ舞とこそぎけ」

14 酒にまじしたる楽しみはなし

酒を酌て舞遊ふより外の楽は世にあらしと也。

三ウ 心あれは宝といへとほしからて

心ある人は、宝も求めず、酒のみ、たのしめり。賢き人のうへ如此。

あたひなき宝といへと一つきのにこれる酒に何□まさらめや

2 君にいのちはとてもかくても

君に心あれは、いのち程の宝はなけれど、それもほしからしと也。

3 つれなきに思ひ止へき我ならず

難面人を思ひ初て、止へきにあらず。とにかくいのちかきりいひなひけんと也。

4 しるて聞はや其名隠しそ

其名をとへとも、難面いひかくしぬること、きかて止へきにもあらず。せひとも聞はやと也。

5 馴にける故はまかはぬ衣の香に

馴ぬる事はまかひもなきに、その人の名をかくしぬるは、いかほとして問なるへし。あらそふ心也。

6 又もあふきの風は忘れす

あぶきは香計しめる物なり。又も逢んと残し心にはまかはぬ事なれば、わすれかたき也。

7 いかにも生の松原おもひやり

すゝしさは生の松原まさるともそへし扇子の風な忘れそ 忘れすもあらんと思ひやるなるへし。

8 心尽しの果しなき道

筑前の国也。「心つくしの生の松原」とよめり。

9 行めぐり幾度生替るらん

六道輪廻也。

10 今えし法のことのはの色

今えかたき人身をうけ、あいかたき仏説を聞事よと也。

11 水にぬれ薪木にやつす秋の袖

法華経は我えし事は薪こり茶つみ水汲仕へてそ知

12 月やとりぬる浦の朝夕

塩やく蟹の有様也。月やとれとは、ぬれぬ物からなとかよひ侍らんか。

13 雁かへる行衛も今や花ならん

海辺の春の曙に、雁帰る行へ思ひやる也。

14 遠く霞める山の閑けさ

行衛の山とも霞める程に花も咲らんと也。

名 春の夜の明るまに／＼鐘鳴て

かすめるは鐘也。遠山よりひゞき来る成へし。

2 夢はかりなるまくら悲しも

「春の夜の夢計なる手枕にかひなく立ん名こそおしけれ」此哥をとりて、付心は別の句也。あひ見し程は夢計のまくらと也。かやうの付方ある事也。

3 打歎く心の闇にまよふらし

在五中將、齋宮と密通の時の哥、二首引合て付たる也。哥の言は多くつゞきけれと、前の夢といふ一字に付候時は、付句にことはつゞきても不苦候。前句に夢のことは多く続きたる時は、付句に聊用ひ侍るとそ。

4 我身にかへて子を思ふ人

人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまよひぬるかな

5 深く世にしつみて住るあかしかた

受領の官を捨て、明石に住とゞまるも子を思ふゆへ也。

6 馴れは馴る磯の笥の屋

きこゑたる通也。浦の栖の浅ましき躰也。

7 中／＼に寂しき物は松の風

さひしかるへき松風も、聞馴ぬれば、つれ／＼もなくさむなるへし。

8 いねかての夜の月は晨明

松風も夢さめて、夜もすから佗へきに、月は在明にて、寐覚ゆへに、結句月をも詠なくさむ也。

9 来んといふ秋さへ末にうつろひて

今来んといひし計に長月の在明の月を待出るかな

10 こひつゝも降袖の露けさ

君こんといひし夜ことに過つれば頼ぬものゝこひつゝそふる

11 祈ぬるしるし有ける雨の空

こひつゝを雨乞に取なせり。ふりくたりて袖もぬれたると也。

12 波立須磨のうらめしの身や

此雨風止給へと住よしの方をむかひていのり給ふと有か。

13 衝鳴声も今朝迄めもあわて

旅寐の枕ちかく、波の音、千とりの声を聞侘て、いとやすからぬ身のなげきをするなるへし。夜前ちかき

ゆへけさとはいへる也。

14 冬田の原の庵さむしも

田守の住居なるへし。

名ヲ 霜かゝる藻屑の煙絶く〜に

田面の藻屑かき侘るも、霜にぬれてふすふる火影絶く〜にて、すむへきにや。

2 あらしに暮る竹の下道

水辺の竹の下道を藻屑ひろひ、帰て風の夕煙なるへし。絶く〜は道也。

3 足柄や花のしら雪踏分て

「あしからや山の嵐に跡くれて雪ふみ分る竹の下道」竹の下道、相模の名所也。

4 関の戸越る春の旅人

あしからの関也。踏分て行駄也。

5 駒いはふ声も霞める朝ほらけ

朝立旅人の駄也。あふ坂を越る成へし。

6 草のむら／＼水清きかけ

叢の清きに水流れて、駒かふへき也。

7 あさやかに池の蓮の咲出て

水草の中□ □ひとり咲出たる陰なるへし。

8 庭に玉敷御仏の国

庭には宝珠を敷、池には五色の蓮花出たる浄土なるへし。追善のあけ句のさまはかり也。

此百韻一覽し侍るに、元来つたなき我連哥なれば、付心わきまへかたく物しける後に、観生に逢侍る時、一句／＼尋きこゑしに、あら／＼物語有けるを、覚候かきり粗書付侍る物也。問委しからねは、猶もれたる事多かるへし。残念／＼、重て又とはまほしくこそ。

水島苗雅

〔注〕「もとの庭田家の雑掌水島右近等もみな京にありて、公の禄を賜はり、いづれも求書の大業に与かつて力ありき。」（藤岡作太郎『松雲公小伝』『辞彙』）によれば、水島苗雅は金沢神明宮の神主から、廷臣庭田重条に仕えて有職の学に通じ、享保4年6月、三十人扶持を以て藩士に列せられ、綱紀の書籍採訪の業を助けたという。宝暦5年歿、享年七十二才。宝永4年にはまだ二十四才（当写本の、このあとの作品年時の下限、正徳6年には三十三才）。

正徳四 十二月廿一日

何人

一村の雪を今朝焼真柴哉

瑞順

いと憂老か身さへに秋立て
寐覚すゝむ□夜な／＼の月

嵐になるゝ冬の山里

慶阿

暁は別て啼か鹿の声
深山嵐の淋しくも吹

枯渡る峯に木伝ふ猿鳴て

ゝ

見し誰も花に残らぬ陰古て

水の響や昏て行覧

順

浅茅交の春の草／＼

幽かなる月に小船の遠さかり

ゝ

二 川水をせき入つゝも返す田に

かへり都は霧寒き空

阿

雨そふ降て空そ昏行

袖に今関路の露を懸初て

ゝ

独寐の思ひに夜半を明し果

草の枕の明そはなるゝ

順

いつ待付て恨もやせん

ウ 聞すへて声する方に認よらん

二

移ろふを頼む心もはかなしや

霞の内の野へのうくひす

一

難面かりける人の末／＼

咲梅の仄／＼匂ふ朝朗

一

うきに猶侘ぬ命の哀にて

谷の扉も春や来ぬらん

一

有家定めす世にそさまよふ

去年迄は住人見えぬ山にして

二

尋ぬる玉の行衛の覚束□

誰枝折せし道の一すし

一

一

月の舍れる露なこほれそ

萩の葉の戦に秋の先見えて

萩も薄も花にこそなれ

心して問はゝ此野の草の庵

詠に近き山ほとゝぎす

ニッ 立田路や行／＼尾上雲晴て

あらしの後の夕日さやけき

檐の葉の時雨にぬれて落残

消す霰の音そ重ぬる

夜もすからいたくも寒き板ひさし

久しく問ん人はうらめし

一度に心浅くや見えぬらん

さのみ思ひは筆に尽さし

又も来て逢□ □も遠からず

必露の身となはふりそ

冷しと聞つる物を山の奥

月は流ぬ滝川の音

散花の跡白波の遥にて

漕行舟や霞わくらん

三 雁も今朝氣をいそく春の野に

引なとゝめそいさ帰らまし

憂は只忍ひ車の我なれや

心つよきを猶も忘れず

物妬止さる末のいかならん

人の形を作るあやしき

誠には世になきをこそ仏なれ

只性を清くしももて

乱るゝも終れる際は様／＼に

秋の裾野の花の頃

月の名の桂の一木陰見えて

払ひ果たる風の雲霧

身を安くなしぬる人の胸の中

水こひ鳥の我は音に鳴

ミッ うき思ひ三笠の山と積り来□

いつ迄齢かく□古里

過し世は夢現とや移るらん

二

一

一

二

一

一

二

一

一

一

二

一

一

一

一

□

二

一

今より心いたつらにせし

山本近く渡□雁か音

1

咲初ぬ身をもよせはや花の下

昨日かも植し田つらに秋の風

1

藤のかほりよ袖にとゝめん

所かへつゝまた馴ぬ門

1

ぬるゝをもいとわぬ物を春の雨

はかなくも人の誘ふに任せ来て

2

泪をそふる別悲しき

うき二道の名にや立まし

1

爰も捨かしこも侘て行旅に

迎も恋生死とても遁れぬや

1

住へき須^(マ)摩の恨られぬる

すてす此まゝ世をし過さん

1

海士人はいかに見るらん秋の月

名ウ
はこくみの事たらぬ身もよしやたゝ

2

其暁を身にしめる袖

待得し君か時そうれしき

1

霧を分出て仕へん心にて

色も猶こかねの花の咲添て

1

ふかき山まで恵普き

朝しめりなる露の山吹

1

名
埋木も春は□□桜花

ぬる蝶も知ぬ計のはるの風

2

古り行我は長閑くもなし

鳥打啼てこもる草垣

1

雪のみか隙こそ添れ此庵

竹の陰はや暮て行冬の日□

□

軒端に落る雨のしたゝり

水の汀の氷初けり

2

時うつるあやめの色は猶あせて

有か無かの水の淋しき

1

入方の月も細江の波の顔

2

〈参考一〉 『燕台風雅』抄

——能順と雅交のあった人たち——

(一) 今枝近義 (宗一・直恒・直方)

(二) 奥村徳輝

(三) 竹田 (忠種・) 忠張

(四) 津田孟昭

(五) 本多政敏

(六) 脇田直能

(一)

今枝近義 (通名民部) 宗一之孫也、(石川丈山今枝内記) 凶像小伝曰、宗一居士者、世為濃州人、姓豊臣、氏今枝、諱重直本名、弥八郎号内記、甫歳十七、属信長、前哨、与朝倉接戰姉川、以獲首級、翌年信長軍於長島攻、擊髡徒及於般、師、賊尾殿兵、居士搏一擲掃退一軍、繼為信雄、家臣、振拔于長久手、交槍血刃一日兩回、因以雄名、簧鼓、當時、從其之後、晉仕、関白秀次、賜姓、豊臣、除朝散大夫起居郎、秀次捐館、而為贈、相前田利長、所招、旣於加府、歴利長泊、黄門利常、偕厚遇之、居士亡、嗣養姪直恒、以為子焉、与故、禄直恒、割一草、改名、宗一、其為人、也、節儉篤実、不詭功勲、不惰忠勤、好咏、倭歌、兼嗜茗飲、澹然自逸、卒

於私第^ニ享^ル年七十有四、力戰之勇烈、蓋^シ够、閱^レ閩功勞載^テ詳^ニ家系、直恒傳^ニ羽林光高、與^リ聞國政^ニ孫近義、復持^{シテ}國乘^ニ世世勿^レ絶、豈^レ匪^ニ居士之貽厥耶、夫可^レ謂^ニ武弁家之雋望^ニ也已、木下錦里曰、(碑略)

直恒(通名民部)勤慎貞亮、寬和有才略、黃門公甚嘉^レ之、選^ニ於衆^ニ舉^テ為^ニ家相^ニ、羽林筑州公之傳、與^リ聞國政、筑州公聰明秀發、日就^ニ月^ニ將^ニ仁声威望、軒^ニ翥^ニ、諸侯之右、大猷廟數、稱^ニ直恒輔導^ニ方、正保乙酉、筑州公奄^ニ逝于東武、今、羽林公年僅^ニ三歲也、黃門公慟^{シテ}謂^ニ直恒^ニ曰、我老^ニ邁^テ斯凶、天之棄^レ我復何^レ言、然、國乃祖先之國也、我可^レ以^ニ我^ニ負^ニ我祖先^ニ乎、其汝克敬、嗣傳^ニ我孫^ニ、其保其護綏^ニ我邦家^ニ、直恒稽首泣血^{シテ}而受^レ命、誓^テ絶^ニ鄉思^ニ、保祐訓護鞠躬尽瘁、越^ニ七歲^ニ没^ニ東武寓舍^ニ、病革也、黃門公枉駕臨視、執^レ手悲訣、君臣之遇可^レ謂^ニ盛矣、遂命^ニ男近義^ニ、復乘^ニ國柄^ニ、繼^テ保^ニ傳^ニ之、近義胆勉惕厲、夙夜匪^レ懈十有一年、羽林公德器早^ニ就、英譽四^ニ馳、万治辛丑以^ニ幕府之鈞命^ニ始^ニ就^ニ國、三州之士民、愛載畏敬莫^レ不^ニ沐^ニ恩霈^ニ而肅^ニ威風^ニ、詩云、靡^レ不^レ有^ニ初^ニ、鮮^ニ克有^ニ終、直恒近義堂構相^ニ承、輔養之勞可^レ謂^ニ有^ニ初^ニ、終者、景周曰、近義亦德行、良大夫也、以^ニ股肱腹心^ニ、練^ニ達典憲^ニ、多^レ所^ニ彌縫^ニ、嗜^テ學平素、讀^ニ通鑑綱目^ニ、余曾觀^ニ其書^ニ、字字加^ニ朱画^ニ而助^ニ句讀^ニ、以知^ニ其不^ニ徒誦^ニ也、執政、大邦而為^ニ經濟^ニ者、其志宜^レ如是矣、別墅有^ニ昭融園八勝^ニ、(曰、金城朝暾、曰白嶺堆雪、曰北林子規、曰南山晴靄、曰茅店殘月、曰野寺鳴鐘、曰広庭春花、曰幽徑霜葉、又有^ニ十境^ニ、曰希潛亭、曰醉妃島、曰臥石台、曰鳧眠洲、曰琢水池、曰早涼閣、曰濯竜館、曰曜武樓、曰觀徳圃、曰金剛洞、是也)皆室鳩巢以^ニ題詩^ニ、(見^ニ鳩巢集^ニ)遺趾今或^レ存或^レ廢、今、易直(通名内記)乞^ニ余作^ニ濯竜館^ニ記^ニ、揭^ニ楹間^ニ、(鳩巢文集中有^ニ今枝氏貫珠軒記^ニ)余聞、近義好^ニ藤式部源語^ニ、時以^ニ小松^ニ、菅神、廟僧能順長^ニ、其說^ニ欲^ニ從^ニ聞^ニ、而其道距^ニ一日程^ニ則貴劇、職無^レ奈^ニ之何^ニ、然、葵心不^レ已、以^ニ故約^ニ相^ニ見^ニ中^ニ一邑^ニ、松任、每日退朝之後、近義自^ニ金城^ニ、能順自^ニ小松^ニ、松任街屋、得^レ聞^ニ了^ニ、其全部、講說^ニ云、可^レ謂^ニ奇癖^ニ矣、近義詩文絶^ニ無^ニ之而亦僅^ニ有^ニ者、如下寬文元年閏八月、松雲公旨、國祖末守、役所^レ帶^ニ甲冑^ニ記事^ニ是也、此記事筆^ニ法^ニ支離^ニ穉

陋、大覚減ニ連城之価、然、金漆以書ニ之、匣上ニ伝ニ公庫ニ也、是雖似ニ近義之幸、実、不レ免ニ文人、雌黄、也、余近得ニ近義所レ作虚直亭記、易直、書楼、匾額ニ而読レ之、其志顯、主ニ無欲、而不レ涉ニ他議、有、下、虚直以所ニ涵食、者、此記收ニ第十七卷、意、以ニ此志、括ニ充、政事、則得ニ治体ニ安、容、疑、延宝三年致仕号ニ信斎、此詞謂ニ直方、（通名民部）備前州岡山日置忠治（通名若狭）次子也、寛文丁未来ニ本藩、信斎養、為、子、亦好、学、詩、所、余得者、劣、五言排律一首耳、即收ニ之、第十一卷、詩力之斤両可ニ推知、若所ニ其立、志者、在、鈴、学、与、本藩、掌故、也、所ニ編述、数十部、有、数、百卷、一、皆手、親、以、国、字、書、今、猶蓄、其、故家、庫中、一、尺、依然、余、乞、覽、之、再、三、大、足、裨、補、国事、享保庚子為ニ室老、領ニ食禄ニ至ニ一万四千石、

〈注〉

今枝近義（イマエダチカヨシ）

一巻万四千石

年五十七 今枝民部

内巻千五百石 与力十三人

（寛文九年侍帳）

一巻万四千石 無組附

五十九 今枝民部

内式千五百石 与力

（寛文十一年侍帳）

○延宝3年2月、退老して信斎と号し、

同7年12月29日歿、享年六十六。

今枝直方（イマエダナオカタ）
○能順との雅交。

今枝内記直方興行

一〇 月清しあまる光や玉霰

今枝氏直方娘ノ悼

四六 露を袖の名残に消し螢

(能順天和三年より発句書留)

今枝直方の忌中に籠らせ給ふに

469 ぬれぬれていかに日くらす夏の雨

(聯玉集・乾四十九ウ)

○元禄5年10月、前田綱紀金沢着のとき、

〈政隣記〉

九月廿七日江戸御発駕、十月九日寅刻御着城、〔中略〕且江戸エ之御礼使今枝民部直方(人持組頭一万四千石也)。如御例に而同日発足。廿一日江戸参着。廿八日登城、御太刀献上。次に自分の御太刀も献上、御目見如例、御時服三拝戴之。十一月五日江戸発、相願東海道より十九日金沢帰着。

(加賀藩史料・第五編)

(二)

師俊〔奥村庸礼〕子德輝字、浚明(舜水、奥村浚明德輝)説、万物本乎天、人本乎祖、今原於尊翁之名、以生足下之名、以著礼之効也、礼曰礼也者、動於外者也、又曰礼極順内和而外順、則民瞻其色而不与争也。望其容貌而民不生易慢焉、故德輝動於内、民莫不承聽、理發諸外而民莫不承順、足下願名而思義則自處必審也矣、是以名曰德輝、一名宣(通名丹波守)、号佃字、号耕心、又号誠齋(舜水、奥村德輝誠齋記)云、世降俗薄、生質漸漓不患不巧、独患不誠、誠者作室之基、培築鞏固、則堂構壺奧、凌雲九層、皆於斯託始焉、子今者旭日之陽、能潛心好學、不荒於嬉、超於世俗遠矣、繇是全其誠而不已、其何所不至

乎、誠者天之道、思誠者、人之道、子慎思之而可乎、大人者不_レ失_二其赤子之心_一者也、非_レ有_二他道_一也、願_レ覬在_レ茲、其勿_レ以_レ儇巧琢_レ之、浚明清貞雅操繼_二先風_一自_レ未_レ冠、受_二教_一舜水先生（舜水答_二父庸札_一書、令郎初到、即願_レ我見_二其举止端詳言辭愀欵大快_二人意_一、昨者貴國_レ君命_二之職事_一、少年得_レ之、此_レ必有_レ以_レ深結_二夫至知者_一賀賀然此_レ乃_レ卿相之始基、而功業之嚆矢、若能日慎_二一日而充_レ之以_レ問學_一、將來建樹、豈惟猶_二夫人而已乎_一、唯在_レ加_レ意懋_レ勉_レ耳）、嘗舜水答_二浚明書_一而勵_レ學（其答書云、前年見_二足下_一時方_二在_二成童_一、轉瞬之間已冠_二已昏矣_一、詩云、未_レ幾見兮突_レ而弁兮、即此也、冠者責_レ為_二人臣_一、為_二人弟_一、為_二人少_一者之行、於人_レ、故_二禮不_レ可_レ不_レ重_一、而足下今將_レ有_レ為人父_レ之責、若失_二今不_レ學_一、不_レ過_二一時俗庸_一、人已耳、出則騎_二大馬_一乘_二高軒_一、僕從如_レ雲擁_二衛之_一已耳、其能有_二類_一之望_レ乎、惟在_二足下_一勉_レ之矣、孟子謂_二文王_一而興者_レ凡民也、若夫豪傑之士、雖_レ無_二文王_一猶興、其言可_レ深長思_レ也、夫待_二文王_一而興、猶且謂_二之凡民_一、待_二文王_一而不_レ興者、其將謂_二之何_一哉、足下欲_レ為_二豪傑之士_一乎、欲_レ為_二凡民_一之不_レ若_レ者乎、吾知_二足下_一必欲_レ為_二豪傑_一矣、他人類_一以_二好言_一贈遺、而不_レ佞責_レ成_二独深_一、非_レ不_レ知_二時俗之習_一也、特_二一日之義_一不_レ可_レ泛泛_レ耳、外具_二花細式_一匹_二非_一以為_レ賀也、但不_レ脱_レ俗已_レ爾、惟希_二晒存_一不_レ一）、景周又聞_二一老人_一、浚明純孝有_二先考嘗所_一栽園梅一株、浚明造_二亭_一其園、自顏_二江南軒_一、使_二源剛伯_一作_レ記（其記云、軒以_二江南_一稱、蓋示_レ不_レ忘也、孔子曰、父_レ在_レ、觀_二其志_一、父沒觀_二其行_一、復思_二其所_一嗜、思_二其所_一樂、見_二其杯圈_一則思_二口沢氣_一之存焉、對_二其殘編_一則思_二手沢_一之存焉、皆道_二孝子之不_レ能_レ忘也、金陵_一平老先生浚明、園有_二紅梅一株_一、每春盛開、浚明指_二其樹_一曰、是考妣之共_レ歡娛_一而所_レ憩也、凡_レ花之晨、月之夜、雪之夕、無_二日_一不_レ愛、古_一云父母之所_レ愛愛_レ之、父母之所_レ敬敬_レ之、而況_二斯花乎_一、浚明發_二舒精神_一、因_レ物感與無_レ不_レ寓、其追遠之思奚_レ止_二愛_二斯梅花_一而已哉、於乎聽_二於無聲_一、視_二於無形_一思_レ之思_レ之不忘、旋及_二疇類_一、則穎考叔之純孝_一亦庶幾乎、一日請_二記_一於余、因_レ寫_二所聞_一以呈贈焉、他若_二留連光景之辭_一、皆略而不_レ陳、言未_レ畢客率爾而問曰、君今居_二江北_一、何以_二江南_一稱耶、曰取_二諸_一晏元獻

江南別樣春之句、是紅梅詞也、復因其考妣之遺愛而稱焉、永示不忘也、豈論地之南北耶、客曰唯唯、尚壯是言、揮余而去、其為人本誠而主敬、發言而徵行、積學之功多炳彪可見者、故公亦恩遇特渥、於政事斷決之処、公必待浚明之言、爲的而止、浚明固無偏頗愛惡之私、達練事體、因情措法、故上下無不懷其德、一宝永乙酉閏四月至病革、公自臨浚明第問病、室直清曰、国老朝散大夫奧村君、有疾久之未愈、我參議公屢遣近臣存問、賜以臥衣、命饋宣病之肉、召其壻前田知頼、許以特恩、一事、且親書以賜之、因諭知頼曰、丹波守自弱齡執事左右、今念其病因、爲之哀憐、既而聞病急、遽臨其第、見君慰藉之甚厚、戒其他老臣相与議醫藥事、其間使者前後相屬絡繹不絕、凡大臣病中禮遇隆、先是所未聞也、君日夜感泣病患若遺、乃諄諄告其令嗣兵部君曰、余事明主沐国恩、無以効尺寸、答涓埃、不知何以得此寵、念君恩之深、無以報之、汝当刻骨銘心、無忘乃父之志、他日竭忠、忠尺誠一、心奉公、則是我之孝子也、又使其族人忠尚以事告僕曰、子願爲文記之、僕云、君子之道、其誠乎、以之事君、則君信其忠、以之接衆、則衆服其義、盖自故老岐君執政之日、其心倦倦、国而忘家、當時順庵木先生、嘗与僕語而稱之、今丹州君繼其遺風、爲衆所望、而雖公亦愛而重之、寵遇之渥、何足怪乎、然君謙謙、不敢自當、謂若不當而得之、此亦可嘉也、易曰、天道虧盈而益謙、僕以爲君之謂、如此天所福則彼二豎辟之、疾病之除、何有日矣、遂錄以応君之需、既而後無幾、易寶于燕寢矣、遂以儒礼葬于野端山先塋之次、先是東照神君百年忌祭、諸侯各上大礼使於下毛、日光山、浚明即自我君侯、時日光山内有所稱古昔得於竜宮城之鐘一口、而鏤銘、其銘說得者未之有矣、諸侯之使聞浚明名、乞說之、浚明不敢辭、上之于口、說之如流、四座愕然、云、又嗜詩、景周推其二二槩、其志氣非無味、八月十四夜云、二七、秋容風露清、夜深氣爽寂、無聲、人間天上都盈欠、未必円、時独有情、其才比乃父似進一籌、

〈注〉

奥村惠輝（オクムラヤステル）

加賀藩の老臣奥村氏支家の第三代。二代庸礼の嫡子。

貞享4年10月、父の遺領を襲ぎ一万七千四百五十石（内三千石与力知）、人持組頭。

宝永元年12月、従五位下丹波守に叙任。

同2年閏4月20日卒、享年五十三。（辞彙による）

○能順との雅交。

元禄十五年二月廿五日 天神追善発句

第七 藤

たくひまたあらしとかゝる松の藤 惠輝（憲）

奥村惠輝朝臣の許にて

めされし時 加州執柄の家にて

国の人々思ひしたかふ心を

498 松風や人なつくめる夏の陰 （聯玉集・乾五十ウ）

(三)

竹田忠種（通名市三郎）亦 微妙公督御、臣、而公、薨後報其殊恩、踏レ節履レ義、与三品川雅直（通名左門）古市胤重等、自刃、以殉、其志炳、秋霜、即有、永訣詞、曰、靈恩難、謝断、生命、鮮血淋漓、灌、梵天、四十二年閏浮、夢、無明醒、尽、一時円、盖此時文風未、播、故是、梵偈頭巾、語、而亡、論、覆瓿、然、予今収、之者、尚、臣節、不可、奪也、与下世間建、区区之介、潔、己、而近、名、反、謬、大義、者、不可、同、日道、也、忠種之子忠張字、知還（通名五郎左衛門）、

師ニ学鳩巢先生、傍好ニ聯歌、与ニ葛巻昌興ニ友、善、嘗当ニ昌興謫ニ能登ニ之日、送レ之詩、二十年来莫逆、情、草堂一別再難レ迎、離騷自レ是出ニ君、手、沢畔行吟、屈子、名、景周誦レ之再三、不厝、以為、真、良友也、予聞、灌夫不レ負ニ寶嬰、於擯弃之時、任安不レ負ニ衛青、於衰落之日、盖、足以響ニ千載之齒頰、矣、及ニ昌興禁錮、雀羅設レ門之時、疇昔所ニ鶴蓋成、陰勢交利、交、輩、忽、避レ之不、顧如ニ塗人、忠張独不レ戾ニ其始、一、苦、送レ之之誼、殆、与ニ夫、灌任ニ抗、焉、嗚乎近世人情日、倍、輕薄、炎、而附、寒、棄、且、莫、為ニ變態、如、忠張、能、不、墜、乃、父、之、遺義、可、謂、有、初、有、終、者、也、忠張又属續之際、賦ニ乾坤同一氣之一句、手自書、与ニ子姪、世、嘆、其、志、之、不、在、區、區、青地礼幹統ニ此句、兼挽、云乾坤同一氣、万古寄ニ生涯、仙鶴去何、住、寒梅落復開、風流空有、恨、遺愛更堪、哀、吟断陽春、曲、傷心軫壯、哉、景周又見ニ僧月坡集、有、下、遊、忠張後園、一、応、需、詩、(其詩ニ一派流泉遶ニ万里、青錢荷葉汎ニ秋光、主賓談レ道楽ニ其案、半鼎清茶与ニ德香、)

〈注〉

竹田忠張(タケダタダハル)

[宝永2年正月25日]

60 竹田忠張「世に句へ我ならてたに窓の梅」といふ句を残して身まかり給ふ悼
消にけり梅を残して春の (聯玉集・乾七オ)

一 三千六百三拾石 年二十六 竹田五郎左衛門

内五百三拾石 与力知三人 火消役

(寛文九年侍帳)

一 三千五百三拾石 人持組 火滅役

二十九 竹田五郎左衛門

(寛文十一年侍帳)

○元禄12年5月26日、五十川剛伯等を能登郡曲村へ流刑被仰付の記事（采庵雜記）に「竹田五郎左衛門忠張・菊池十六郎武庸・伊藤平右衛門重微（各寺社奉行）」と見ゆ。

(四)

津田孟昭（通名玄菴）号ニ仙令、所居、名嘉楽亭、又名温故斋、本姓、斯波、（道朝之後也、近時景周庇需、為、津田政本）制家譜、故此略（顯末）歳禄後至一萬石、孟昭為人、環偉倜儻、有、韜世之度、松雲公、時列、執政、兼、為、世子傳、及、老、優命解職、自号、義門、嘗從、鶴皋先生、受、教誨、余曩歲得、義門、詩百首、讀、之、瑕類及、八分、少、入、選者、然、如、元禄乙亥七月赴、涌浦温湯、行紀三十五首、一一善写、地景、鶴皋有、後序、（其略、云其所、題咏撰著、觸、景起、興、感、事據、詞、江海之際、縱、一葦之所、如、峯巒之上、仰、孤輪之所、照、登山臨、水、轉、山光水色、於眼界、吟、風嘯、月開、清風明月、於心地、乃詠、其詩、吟、其句、則如、目觀、美景、足蹈、佳境、而邀、遊乎十州三島之中也、凡、短章長篇、總、三十余首、藻思逸麗、復、不可言、按、鶴皋之言、雖、過獎、亦非、無、此趣、又為、鳥山輔寬、所知、芝軒吟稿中、有、謝、義門惠、鰈魚、詩、（其詩、云、綿密包、來織、綠筠、開、封鬢、鬢尚如、新、肉、肥、庀、飽桃花、水、味美、尤、宜竹葉、春、更、愛、名稱呼、桂字、殊、憐、狀、貌似、鱸、身、退、方、予、輩、受、君、惠、館、下、知、無、彈、鋏、人、）乃父正真（通名玄菴）亦願、志、於詩賦、一、師、学、丈山石川翁、屢、乞、藥、括、而、不、屑、翁、美、其、詩、因、字、書、今、猶、藏、其、家、嘗、翁、送、加、府、津、田、氏、自、洛、來、此、告、別、五、律、見、覆、醬、集、（其詩、云、使君愛、老、朽、欸、寂、告、婦、家、詩、恨、交、通、淺、酒、羞、別、路、賒、四、時、白、山、雪、三、逕、赤、城、霞、欲、領、騷、壇、將、只、須、熟、澆、花、○正真詩、則、修、竹、向、涼、絕、句、修、竹、掩、櫺、幽、栖、足、晚、涼、得、如、慰、吟、生、忽、消、殘、暑、千、竿、裏、風、露、青、青、月、亦、清、書、八、幡、猩、猩、翁、高、弟、後、世、正、真、書、誤、為、翁、者、不、寡、云、）又義門、子、敬、修（通名修理）号、東、臯、学、詩、於、深、山、壺、峰、然、粗、鹵、如、嚼、蠟

〈注〉

津田孟昭（ツダタケアキラ）

父・正真（マサザネ）も玄蕃、延宝3年歿。

一八千石

年五十二 津田玄蕃

火消役

（寛文九年侍帳）

一八千石 人持組 火滅役

五十四 津田玄蕃

（寛文十一年侍帳）

七月九日、津田孟昭の下屋敷の蓮池にあそびて

819 秋かけて夏の日永きはちす哉（聯玉集・坤三十一才）

津田正忠（ツダマサタダ）

加賀藩臣。小字忠三郎、後玄蕃。正真の父、孟昭の祖父。

万治3年8月6日歿、年六十二（辞集）

〔元禄5年〕

津田正忠の三十三回忌

812 うかりけり是やむかしを今の秋（聯玉集・坤三十才）

(五)

本多氏、本姓藤、其祖政重、佐渡守正信之次男也、筮仕我 国祖、賜歳禄五万石、家世为国卿、至政敏字澹静、
（安房守）、崇儒学、該通禅（澹静与大乘）、月舟万山金竜、月坡等、为三方外交、三師録中可徵、黄蘗香泉亦有遊

仙遊台詩、号ニ鶴夢、号ニ天淵、号ニ臥僊、所居、名ニ仙遊台、平素愛ニ陶靖節之為人、使ニ源鶴皋、作ニ夕佳亭記、（其記云、遊ニ仙遊台之日、偶攜ニ筇、於青螺峰下、閑行數日、步傍レ流過レ橋到ニ把茅軒、其傍及ニ林木幽翳、処、關レ地數畝、構レ堂數椽、中ニ因ニ靖節先生之像、而置焉、主人且属レ余、題ニ其名、因、取ニ山氣日夕佳之句、榜、曰ニ夕佳堂、復命、作レ記以頌ニ先生之德、盖先生之為人、不ニ戚ニ戚於貧賤、不ニ汲ニ汲於富貴、詩酒常為レ樂、琴書永消ニ憂、於乎先生之德孰能頌レ之、東籬之花黃、全滴レ地先生富也、南山之高不ニ蹶不ニ崩先生之寿也、凜凜、凌レ霜松栢愈堅、先生、節也、耻レ事ニ二姓、遂不ニ復仕ニ先生、義也、噫千歲之下讀ニ其書、尚想ニ乎其人、況得レ登ニ其堂、拜ニ其像、者乎、凡晉、至レ今、且千有余歲、其際王侯大人、富貴、湮滅、者、不レ可ニ称數、先生閭巷清貧之士、独以ニ節義ニ著、故使レ天下後世之人到ニ于今、称說之不ニ衰、則世之欲、以ニ感福、取ニ勝者不レ感歎、時、見ニ螺峰日夕悠然雲、起、因為ニ先生ニ歌曰、雲唯無心、或、去或、留、人唯慕レ道、樂以忘レ憂、北窓之下、永与ニ義皇ニ遊、又使ニ室鳩巢、作ニ瞰虹樓記（此記既刊、在ニ鳩巢集）、澹靜之学也、於ニ正心誠意之工夫、雖、不レ能、抗ニ蒙窩間宇、二奥、〔奥村庸礼・惠輝父子〕而論レ、詩腸、錦繡、二奥、遥不レ泊、蓋其所レ尚、非ニ鏡花水月、意境、要、開ニ尖新奇巧之生面目、入、石湖誠齋之室、而百年前既、成、今日海内詩人趨ニ宋元ニ之先鞭、故、在ニ當時、則非、無ニ取舍之議、然、見、諸、今日、則其先入之眼可ニ劇賞ニ焉、咏ニ楓林月、詩、秋來乘レ興放吟、軀、憐見紅林欲、暮殊、写出、月規、以レ何比、珊瑚枝上桂、銀珠、其体裁可レ知焉、若或、至、癸、感歎之際、者、有ニ古詩十九首之遺、中元前夕野田靈廟前詩、感、時秋日暮、浮世恨、無、常、尋、友、一、年、裡、十、人、八、九、亡、新、碑、添、寂、寞、古、塚、自、荒、涼、藜、露、濕、衣、到、悲、思、使、我、傷、使、読、者、掩、淚、酸、鼻、澹、靜、又、富、臨、池、技、雖、未、到、孤、蓬、自、振、之、地位、縱、横、田、道、行、草、掇、筆、不、經、意、立、成、不、為、近、來、來、舶、書、客、之、時、際、所、眩、拈、我、胸、襟、而、瀉、宋、元、名、家、風、韻、如、小、白、山、本地堂。大乘禅利、浴室。暨、能登州鹿渡島大悲閣、扁額等、生動之勢天機迅露、筆情墨趣入神、又嘗、澹靜在ニ江都、公邸、日、同、姓、某（通名作十郎、大府、臣、其、美、澹、靜、子）懷、一、袋、奇、南、香、來、曰、是、府、官、一、相、室、有、故、及、

貧、鬻^ニ之^一、小^ニ円金百兩^一、而欲^レ當^ニ彼^一、先考忌祭之資用^ニ、乃^ト父可^レ買^否、澹靜不^レ及^ニ疑議^一、一諾^{シテ}、憫^ニ相室^一、志^ヲ、即^ハ與^ニ百金^一、併^テ還^ニ奇南^一、既^{ニシテ}、而澹靜赴^レ北^ニ、經^ニ東海道^一之時、三絃^ノ、松原^{ニシテ}、鋪^ニ紅氈^一數十張^ニ、斟^レ酒為^ニ旅況^一、游宴^{、宴^ヲ了^テ、不^レ收^ニ紅氈^一、使^メ臣^ヲ、依然^ト、其地^ニ棄^ル、歸^ル、云、澹靜氣局之高曠、胸懷之磊落、直^ニ大邦巨室之識見^一、如^ハ斯^ニ二快事^一、一人以^テ為^ニ美談^一、(事見^ニ集古雜話^一)、}

〈注〉

本多政在 ↓ 本多政敏

本多政敏 (ホンダマサトシ)

加賀藩の老臣本多氏の第三代。第二代政長の嫡男。初諱政良・政在。

元禄14年7月4日、政長より家督相続、同15年4月10日、従五位下安房守に叙任、正徳5年3月19日歿、享年六十三。

○能順との雅交。

本多政在卿

五〇 露をおもみ風待あへぬ蓮哉

政在卿ニテ

七七 秋風の月は時雨の雲間かな

(能順天和三年より発句書留)

元禄十五年二月廿五日 天神追善発句

第三 苗代

苗代に栄え見えけり民の門

政敏

本多政敏朝臣の許にて

53 おほけなし袖なにほひそ梅花（聯玉集・乾七才）

本多政敏朝臣の山中の温泉へ

入湯おはしましゝ時

820 秋さむみ出湯は神の恵み哉

おなし御時

821 こかるゝやかけも出湯の下もみち（聯玉集・坤三十一ウ）

本多政敏朝臣の亭にて

梅か枝を蒔絵しける文台開ニ

962 梅か枝は花の常繁か冬の陰（聯玉集・坤四十五オ）

本多政長（ホンダマサナガ）

加賀藩の老臣本多氏の第二代。政重の四子。母は西洞院時直の女。正保3年12月、前田利常の女春姫を娶り、同4年3月、父隠居のあと家禄五万石を相続。元禄4年12月27日、従五位下安房守に叙任、同14年7月4日、政敏に家督を譲り、15年、薙髪して素立軒と号し、宝永5年8月9日歿、享年七十八。（辞彙による）

寛文2年11月8日「賦初何連歌」百韻興行。へ作品一三〇

本田安房殿

庭や是うつし越路の雪の山（宗因発句帳・八十六ウ）

本多安房守政長興行

九 松の風いく夜つもりて今朝の雪

本多政長卿興行

四九 陰に守氷室や同じ松の雪

安房殿ニテ

六三 一村に千種もなひく薄哉（能順天和三年より発句書留）

〔元禄13年〕

本多政長朝臣の七十に成給ふ

年の賀に、鳩の杖に添奉りて

284 千と世をも経よ七かへり老のはる (聯玉集・乾二十九才)

政長朝臣の書院開の御会ニ

649 広くすむ宿にこそ見め秋の月 (聯玉集・坤十四ウ)

元禄十五年二月廿五日 天神追善発句

第十 桜

咲続く陰や常盤の家桜

政長

(一六)

脇田直能、(通名九兵衛)所居、号ニ灑雪亭、錦里先生門人也、先生游ニ此亭ニ詩、竹樹連ニ岩壁ニ、軒亭抛ニ水源ニ、飛泉陰雪灑、高榜細雲翻、僚友集ニ仁里、弟兄同ニ義門ニ、勤勤主人意、酒茗到ニ黄昏ニ、景周按、此詩中、景況、与ニ今其故家、所ニ望符、如ニ直能、学量、無ニ隻字可レ見、則佳否不レ可レ論、然、作レ詩者、以下錦里集次ニ韻、脇田九所ニ贈絶句、試ニ誦ニ来詩、如レ対面、不レ知身既、在、平安、可レ知焉、又学ニ茶式、於千、宗室、而白ニ眉、其門、余、家今藏ニ直能所レ制茶匕一把、(宗室之来ニ本藩、在ニ寛永三年、時、僧玄機峰、送ニ千氏宗室居士之加州、行ニ五絶、宗室老居士於レ茶大悟、人間譚茶事、処、句々祖師、禅、後、微妙公召ニ小松、賜ニ歳禄二百石、又賜ニ居宅、月城ニ)直能、父、曰ニ直賢、(通名九兵衛)本姓、金韓、人也、文禄元年朝鮮之役、浮田中納言秀家、将ニ大軍ニ至ニ釜山浦、直賢之父翰林学士金時省、防ニ戦、為レ国死、時、直賢僅ニ七歳、為ニ秀家ニ所レ擲而來ニ備前、岡山、明年癸巳、秀家、夫人憐ニ其孤弱、以レ

有_二通家之誼_一、送_二芳春夫人_一於金沢、夫人閔_二其險鸞愍凶_一、躬親撫育、於是瑞竜公年俸賜_二百斛_一為_二近侍童_一、及_レ長使_二脇田_一姓、冒_レ之、相_レ伝直賢每_レ遊_二小竜台牛阪上_一、目_レ送_二自_二稚松山下_一、晝水流尾西走_一、以_レ彷彿故国、地景_一、垂_二思郷涙_一云、直賢以_レ浪華之役玉造口、樹_二槍功_一、拔_レ衆、微妙公為_レ之賜_二家秩千斛_一、直賢又長_二聯歌_一、与_二菊池武康淺井政一等_一友、善、如_レ慶_二壽_一、松雲公生髮、儀_レ発句_一、(戴也千年初乃霜乃松、時、陽広公嗣、賜其第次句第三句、次句曰、緑茂春仁靡久呉竹、第三句曰、長閑奈流池乃巖仁鶴乃居天)、贈_二炙_一人物_一或嗜_二歌道_一、伝_二受_一、古今秘決、於_二一華堂乘阿如見_一、微妙公累_二賞_一精_二穀_一、其技能、万治己亥解綬号_二如鉄_一、明年七月卒_二于家_一。

〈注〉

脇田直賢・同直賢（ワキタナオタカ）

○明暦3年8月25日「於社頭始興行」何田百韻「千世の秋神や告げん松の声 利常」に出座。八人目（家臣ノ二人目、能順・

孝治ノツギ）

〈作品一〉

〔万治3年7月〕

脇田直賢の身まかり給ふ悼

528 露の世は其言種を名残哉（聯玉集・坤二オ）

〈政隣記〉

一、今年〔正保2年〕春犬千代様御髪置に付、脇田九兵衛直賢如鉄入道は、子供多出生之儘所持仕に付、白髪を指上。依之従光高公金子一枚・御小袖一重、従犬千代様御脇指康光、従御母君_{清泰院}銀子十枚・御小袖一重被下之。並御同女様より、九兵衛妻女_二銀子十枚・薄絵御小袖一重被下之_一。又御祝儀之発句可差上旨就御意に、

戴くや千年初の春の雪

直賢

みどりも春になびく呉竹

光高公

長閑なる池の岩ほに鶴の居て

同

〈参考〉 息直能の知行

一御馬廻六組〔ノウチ〕

千七百石

内式百石 頭料 御用人

脇田九兵衛

(寛文九年侍帳)

一千七百石 馬廻組首 用人係兼獅子土藏金銀支配

六十二 脇田九兵衛

内式百石 役料

(寛文十一年侍帳)

『白山万句——資料と研究——』所収

△藁草・その一 内容一覽▽

△資料三▽波着寺／安養坊／空照(白山諸雜事記)

△資料四▽北村宗甫(白山争論記・白山一卷より)

△資料五▽脇田如鉄家伝記／源氏物語相伝之事(一華堂)／古今伝授之事／岩崎と申年寄女中

△資料六▽梅林院祠堂銀之事／九津屋次郎右衛門

△資料七▽京都町人御用相勤申者共(御夜話衆の内)

△資料八▽浅井源右衛門政右(先祖由緒一類附帳)

△資料九▽日本行脚文集(金沢／白山詣／小松)

△作品一▽天正10年2月18日「花になを」源氏竟宴会

△作品二▽文禄3年3月4日「年をへは」高野山百韻

△作品三▽元和8年6月16日「涼しさの」深曾木祝か

△作品四▽寛永21年3月17日「開より」光高降誕夢想

△作品五▽「下栴こかるゝ松の」板津左兵衛直頼独吟

△作品六▽明暦2年4月5日「蟬の羽に」直頼追善

△作品七▽明暦2年9月25日「松に菊」勸請祈念か

△作品八▽寛文2年11月8日「庭やこれ」宗因・政長等

(P 268 へつづく)

〔能順一〕

小松天満宮・北畠宮司家蔵写本
『能順天和三年より発句書留』

〔表紙〕

天和三年
学^③堂^③発句

〔表紙裏〕

□和三亥 壬五月於京都

於学^③堂

妙心寺

龍海餞別之詩韻之

和 盟字

一 めくりあはん盟りや時雨松の風

加州ニ下リテ

由比孫兵衛正及妻女悼

二 風さむしいかにむなしき夜半の床

梅宮ニテ

三 桜花咲継梅の宮居かな

北国ニ下向 山中ニテ

四 行心花にしたかふ山路かな

帰山の辺に泊りて 三月尽

送

五 我もさはつれなん春の帰山

宗祇像開

歎生興行

宗（消シテ上へ）

六 世々に聞名もいや高し郭公

政右山代入湯之時分 云遣ス

七 山里の伝たにゆかし郭公

九津屋次郎右衛門了武興行

八 白雲を雨の五月の光かな

本多安房守政長興行

九 松の風いく夜つもりて今朝の雪

今枝内記直方興行

一〇 月清しあまる光や玉霰

浅井源右衛門政右宅ニテ、直忠・正供四吟

一一 降にきと告しやかくて宿の雪

一八 松風や聞渡るさへ下涼み

当春あつむ月次始 法橋能在坊作代

浅井源右衛門政右妻女ノ悼

一二 神松の言葉茂れ世々の陰

一九 床夏の契も露のうき世哉

西本願寺下

菱屋庄兵衛重直興行

勝満寺行誓興行

二〇 栽残す木の間は月の砌哉

一三 夕露の螢にそよく草葉哉

桔梗屋六右衛門（正治）興行

桔梗屋

岡崎之家ニテ

壬五月 七左衛門正信興行

二一 山里やおもふによらは秋の月

一四 雨長し今年まれなる五月哉

菊屋理右衛門直之興行

大森三郎兵衛好治興行

当春家作リタルニ

一五 風露の色にも竹の若葉哉

二二 紅葉にも心見えけり家桜

石河正謙興行

能作家之床ノ内ニ、狩野縫殿助

平岡之山庄幽於更幽軒

松梅を多かける時、発句所望し

一六 郭公山かすかなる行多哉

ければ

有馬涼及興行

二三 うつし絵はおもふ色そふ梢哉

一七 陰涼しさそ仙人の宿の松

玉泉寺其阿母ノ悼ニ京ヨリ

石河正謙北野之家ニテ

二四 哀いかにおもふ袖さへ野への露

興行

梢に色鳥あつまりたるをみて

二五 色鳥の色をあらそふ木の実哉

好治ニテ当座 一二付

賀茂にて

三四 霜白き落葉は月の桂哉

二六 水清し岩本柏夏のかげ

素久ニテ 同 一二付

初秋

二七 萩の葉に待とる秋の夕哉

三五 梅咲て梅春□いつはる春や神無月
咲や梅春いつはらぬ神無月

能舜法師五十年忌

三宅庄兵衛重直ニテ

二八 わか身こそ古き形見の忍草

三六 春秋の色にとられぬ冬木哉

名月（大雨）雷電ノ夜

大森好治ニテ

二九 人の心空なる月の今夜哉

三七 雲風の色のつもりや峯の雪

十三夜

歳暮

三〇 有し夜に勝りかほ也秋の月

三八 身の外に思ひて暮す年もかな

浅井政右子息以政にをくれて

辛未〔元禄4年〕ノ元旦

愁傷をとふらふとて、九月廿七日

三九 身こそあれ心なふりそ花の春

三一 おもふらん露の世いかに袖の上

好治両吟

十月一日

四〇 梅柳風をあらそふ色香かな

三二 三冬てふ日数や今日は一時雨

比叡山ニむかへる庵ニテ

微妙院殿三十三回忌

四一 後猶残る雪におもへは高峯哉

三三 めくりきぬ其世の時雨老の袖

渡部宗堅・好治三吟一折ニ

四二 前梅か香に雪の塵かふ袂哉

横山氏従

好治柴屋文台開ニ

五二 螢さへ添て玉飛泉哉

四三 いかにその詠いかに柴屋の山桜

佐藤治兵衛

於仁和寺

五三 白露をあつめてこほす蓮哉

四四 いつれ雲大内山の山桜

前田知頼

四五 散花を見は山寺の夕哉

五四 瀬の声は秋風近き夕哉

今枝氏直方娘ノ悼

月次始 政右

四六 露を袖の名残に消し螢

五五 茂れ猶言の葉風の下涼み

牧屋久兵衛正□興行

慈雲寺

四七 影見えて取とめぬ風の螢哉

五六 常盤木の下露涼重し夏の雨

能美屋□ □一茂興行

湯原^(ち)応信

四八 蟬の音に戦く露散木陰哉

五七 取とめぬ風ならなくの扇かな

本多政長卿興行

板津直景

四九 陰に守氷室や同じ松の雪

五八 絵にかけは草木に風の扇哉

本多政在卿

夕貞しけるあたりにて

五〇 露をおもみ風待あへぬ蓮哉

五九 夕貞のはつかしけなる小家哉

長瀬湍兵衛

正□両吟

五一 常盤木の時も有けり下涼み

六〇 身にそしむみぬ色ふりし秋の風

長瀬善右衛門

六一 さ夜更て月しつまる影月や萩の露

宮丸や成正

六二 朝貝は露の花なる匂ひ哉

安房殿ニテ

六三 一村に千種もなひく薄哉

半田五郎左殿悼

六四 稲妻の影にしほるゝ袂哉

天神講御作代

六五 桜葉の宮居時めく紅葉哉

名月

六六 今夜月秋を出けるより出し光哉

湯原氏応信ニテ

六七 白露に虫の音清き小篠哉

松田助左衛門ニテ

六八 一本に秋や庭もせ花薄

浅井氏政右悼

六九 袖しほる外なき露のうき世哉

七〇 なれし世や恨にかへる老の秋

同会ニ

七一 玉よはふこたへや化し袖の露

金沢ニテ 清杯・既白三吟

七二 峯の月汀まさされる光哉

踞道ニテ会

七三 染るのみ色か草木の秋の風

会

七四 朝霧の花に晴行野風哉

会

七五 空にこそかよふ心也けり月の友

十三夜

七六 望月に光あらそふ今夜哉

政在卿ニテ

七七 秋風の月は時雨の雲間哉

湯原源七ニテ

七八 松の葉をもとかしけ也カ葛紅葉

慈雲寺ニテ

七九 鹿の音の薄に残る山田哉

十月朔日 中里六左衛門ニテ

八〇 夕暮の冬も来にける時雨かな

坂倉助太夫懐旧 息善助興行

八一 とふ道や木葉にふかれ昔の下

林助左衛門興行

八二 霰にもあらそふならの枯葉哉

奉悼 清山大姉

八三 はつき木のよそに別る落葉哉

八四 昨日みし遠山風や今朝の雪

△薬章・その一 内容一覧▽

△作品 九▽正的・宗因兩吟「日々にうとき」ほか

△作品一〇▽「五月雨は」政長等（本稿より初一順）

△作品一一▽正的・能順・直景 兩吟・三吟（三物）

△作品一二▽寛文4年5月 夢想（本稿より初一順）

△作品一三▽寛文9年正月 夢想（ ）

△作品一四▽寛文11年「行秋の」横山内記・昌程寺

△作品一五▽寛文11年正月「雪はけに」正勝等 夢想

△作品一六▽寛文12年8月19日「来る雁も」別本23日

△P262よりつづく▽

△作品一七▽延宝3年8月「いつくとも」他政右独吟

△作品一八▽延宝6年中秋「山中ニテ」政右等三吟

△作品一九▽延宝7年5月9日6月朔 横山左衛門等

△作品二〇▽延宝8年2月10日14日 横山玄位等千句

△作品二一▽延宝9年9月10日 直忠家二見瀉文台開

△作品二二▽天和3年正月19日30日 横山内記興行

△作品二三▽「みたるなよ」横山内記興行。玄的等

△作品二四▽「人心の巻 十四吟」本多政長等一門